

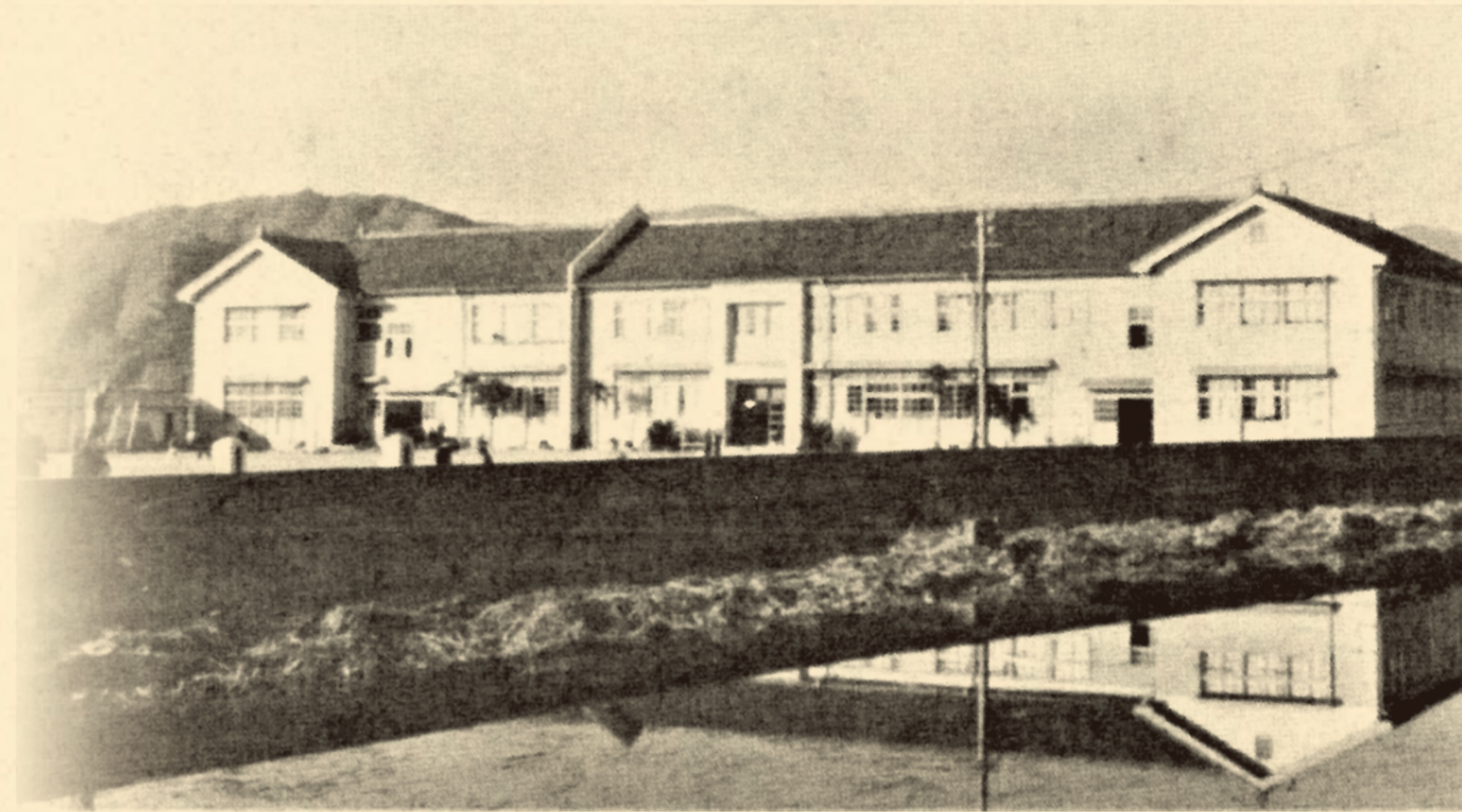
大津 / 高知市合併50周年記念誌

はばたけ大津3

～ 合併から50年、そして未来へ ～

大津 / 高知市合併50周年記念誌
はばたけ大津3
合併から50年、そして未来へ

大津 / 高知市合併50周年記念誌編集委員会



大津 / 高知市合併50周年記念誌

はばたけ大津3

～ 合併から50年、そして未来へ ～

目次

挨拶	大津 / 高知市合併 50 周年記念誌編集委員会 会長 濱田 敏裕	1
大津 / 高知市合併50周年に寄せて	高知市長 岡崎 誠也	2

1 長岡郡大津村から高知市へ

1-1 大津村と高知市との合併	下元 正清	4
【資料】高知市、大津村、介良村合併協定書		6
市村の廃置分合について（高知県知事への申請）		8
1-2 合併当時の大津村		
大津村の合併 ～大津村の時代を回顧する～	一柳 信幸	9
旧大津村に転入して55年	竹村（旧姓 川久保）雅澄	10
大津教育振興会の設立とともに歩んで		
顧問（前理事長）岡崎洋一郎		11
1-3 大津の農業		
高知市農業協同組合大津支所の歩み	支所長 杉村 多穂	13
大津の農業	野島 永廣	14
合併当時の農業などをふりかえって	田所 隆雄	16

2 合併から50年 大津の今

2-1 健やか大津の子		
大津保育園の歩み	大津保育園 園長 山岡 美賀	20
心豊かにいきいき輝く大津の子	大津小学校 校長 岡林 宏枝	21
大津賛歌 ～初めての赴任から～	大津中学校 校長 須内 康雄	23
2-2 安全・安心のまち		
国分川・舟入川河川激甚災害対策特別緊急事業について		
高知県土木部河川課		26
'98高知豪雨後の下水道事業による内水排除対策		
高知市上下水道局下水道整備課		27
大津 / 高知市合併50周年記念誌寄稿		
高知東警察署 署長 肥本 裕二		28
防火・防災をめざして 高知市消防団大津分団 分団長 笹岡 充		32
高知城東病院の歩み	医療法人厚愛会高知城東病院	34
2-3 コミュニティ活動		
コミュニティ計画推進市民会議から連携協議会へ		
大津まちづくり連携協議会 会長 濱田 敏裕		35

いきいき百歳体操大津地区連合会	会長 濱田 りえ ……………	37
おおつ祭り実行委員会	副委員長 横山 貴博 ……………	37
大津校区交通安全会議	会長 澤田 昭子 ……………	38
大津地区公民館連合会	会長 今村 隆一 …………… 会計(元会長) 藤岡 省次	39
大津体育会	前会長 西川 慶 ……………	39
大津地区タウンポリス	代表 田所 稔 ……………	41
大津地区町内会連合会	会長 藤岡 省次 ……………	41
土佐大津戦没者慰霊祭執行委員会	会長 安松 幹夫 ……………	42
日本赤十字社大津分区	分区長 高村 宏 ……………	43
舟入川を美しくする会	会長 今村 隆一 ……………	43
大津文化祭実行委員会	会長 濱田 敏裕 ……………	45
文芸おおつ編集委員会	元編集委員 西川 淳一 ……………	46
大津地区暴力追放推進協議会	会長 山添真次郎 ……………	47
大津民具館保存会	館長 田所 稔 ……………	48
大津地区民生委員児童委員協議会	会長 田所 稔 ……………	49
大津地区老人クラブ連合会	会長 藤岡 省次 ……………	49

3 大津の未来

災害に対する心構え	大津地区地域防災会 会長 濱田 敏裕 ……………	52
国分川・舟入川の堤防耐震化について	高知県土木部河川課 ……………	53
水道事業の歩みと変わりゆく時代への挑戦	高知市上下水道局水道整備課 ……………	54
大津の未来について	大津小学校6年生 ……………	56
私たちの大津、これからの大津	大津中学校3年 池田 彩乃 ……………	60

4 資料編

合併前の大津村界限	……………	62
新聞記事	……………	64
航空写真	……………	78
大津の世帯数・人口の推移	……………	82
大津 / 高知市合併50周年記念誌編集委員会委員名簿	……………	82

【表紙写真：昭和27年改築された大津小中学校校舎】

挨拶

大津/高知市合併50周年記念誌編集委員会 会長 濱田 敏裕



昭和47(1972)年2月1日、長岡郡大津村は高知市と合併しました。令和4(2022)年2月1日をもって、丸50年が経過したことにな

ります。

合併50年を迎えるに至り、大津がどのように変わってきたのかを検証してみようという声が上がリ、本委員会を立ち上げました。

コロナ禍中ということもあり記念式典等はせず、合併50周年記念誌のみ編集・発刊する運びとなりました。記念誌作成のための組織づくりから始まり、発行部数の検討さらには記載内容、原稿依頼先の検討等、編集委員会の皆様方には本当にお世話になりました。

編集委員会では、半世紀の大津の歴史を振り返った記録誌となると同時に現在の課題を確認し、未来への展望が読み取れる記念誌としたいとの位置付けとなりました。

ここ大津地区においても、50年前のことを知る方は本当に減ってきました。寄稿をお願いした関連組織の方には、50年の流れを紐解くという困難な依頼をして誠に申し訳ありませんでした。

私は、生まれは大津ではなく、合併当時はまだ中学校3年生。帰宅時、揺れるバスの車窓から舟入川の向こうに見える田辺島界限の家々から漏れる灯を漠然と眺めていた記憶があります。

日々の生活の中、無意識で大津の街を見てもその変化には気付かないと思いますが、これを同じスポットで1年毎に1コマずつ描き50枚の絵として見たら、驚くほどの風景の移ろいに気付くと思います。また、そこに住む人々のライフスタイルの変化も50年の時の経過で見たら隔絶の感があります。

末筆となりますが、本記念誌にご寄稿いただきました皆様方、写真等の資料をいただきました皆様方には心から感謝申し上げますとともに、この記念誌が大津地区の歴史の中で、住民の皆様方の心を繋ぐ一助となることを祈っております。

大津/高知市合併50周年に寄せて

高知市長 岡崎 誠也



この度、大津地区と高知市が合併し、50周年という佳節を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。

古くは、浦戸湾の三津と言われた大津地区は、まさに歴史の宝庫であり、高知市最古の遺跡である高天原古墳群や大津城跡などの歴史的遺物、さらには平安時代に紀貫之によって著わされた『土佐日記』にもその地名を見ることができます。

そういった各時代を象徴するような史跡や文化が現代にいたるまで伝承されてきたのは、この大津地区にお住まいの皆様のお熱いお気持ちや、愛着の強さがあったからこそだと思います。

さて、合併してからの50年間、大津地区には様々な変化や出来事がありました。

大津バイパス、南国バイパスという二つの幹線道路の開通や、県下の食品製造業の中核を担う大津食品工業団地の発展などによる都市化の進展に伴い、現在の大津地区の人口は、合併時の約2.5倍になっています。

また、平成10年には、私自身も忘れることのない出来事である、高知豪雨が発生しました。予想もつかない未曾有の災害により、大津地区は甚大な被害を受けましたが、この豪雨災害の経験を活かし、

地区ごとの定期的な避難訓練の実施や小中学校での防災教育の徹底、災害発生時にすぐに対応できる人材を育成するための『大津地区における災害対応への指針』の作成に取り組むなど、防災に対する意識の高さは、他に誇るべき模範となっています。

まちづくり活動においては、豊かな自然を活かしながら、懐かしいふるさとと思えるようなまちとして子どもたちに引き継いでいきたいという願いを込めて、平成11年に、「水と緑・歴史と文化の里大津」という将来像を掲げた「大津コミュニティ計画」が策定されました。そして、「大津地区コミュニティ計画推進市民会議」を中心に、「大津文化祭」等の子どもたちに人気の地域イベントや、大津食品工業団地周辺を含む一斉清掃など様々な活動に取り組まれてきました。

さらに、令和元年には、地域住民同士の助け合い・支え合いの活動をより継続・強化させていくことを目的に、「大津まちづくり連携協議会」が設立され、これまで市民会議が担っていた役割を引き継ぎ、地域コミュニティの再構築に向けて各種活動に取り組んでおられます。

これからも、大津地区の誇る歴史と文化が次世代に伝承されるとともに、お住まいの皆様が安心・安全な暮らしを送っていけるよう、大津地区の益々の発展を祈念しまして、50周年の挨拶とさせていただきます。

長岡郡大津村から高知市へ

大津村と高知市との合併

※ この文章は、下元正清さんが、「大津/高知市合併30周年記念 ～はばたけ大津2～（平成15年3月10日発行）」に寄稿されたもので、ご本人の承諾を得て掲載しました。

なお、編集の都合上、「縦書き」を「横書き」に変更させていただきました。

下元 正清

1 合併の機運高まる

明治22年（1889年）法に基づいて高知市が誕生した時、大津も装いを新たに村制が敷かれた。

それ以来高知市は人口の増加や産業、交通の発展により、周辺の村と次々に合併する。そして昭和17年（1942年）6月には、朝倉・鴨田・長浜・浦戸・御豊瀬・三里・五台山・高須・布師田・一宮の各村と合併し、高知市の面積と人口は飛躍的に拡大した。

この時、高知市では当然のように大津村との合併も考えたようだが、大津村はあまり関心を持たなかったようである。

昭和28年9月1日「町村合併促進法」が制定されると、にわかに町村合併が大きな課題となった。特に大津のような財政規模の小さい村では、新規の大事業などの実施は望むべくもなかったため、周辺の市町村との合併を志向せざるを得なかった。

大津村は、昭和29年1月、町村合併に村民の世論調査を行った。また部落別に懇談会を開き、村民の意思を問うた。世論調査の結果は、別掲の通り100%の世帯が高知市との合併を希望し、懇談会では意思に反する合併を強行する時は、分村も辞せずという強硬な態度を表明した集落もあった。

集落世論調査表（昭和 29.1）

集落別	総世帯数	合併希望別		
		高知市	岡豊村	介良村
田辺島西	55	55		
〃 東	55	55		
〃 中	51	51		
鹿 児	74	74		
舟 戸	52	52		
北 浦	51	51		
関	101	97	3	1
長 崎	60	52	4	4
天 神	32	32		
計	531	519	7	5

備考 関、長崎の岡豊、介良村との合併希望は、高知市と合併できない場合

県は地方課に推進本部を設け、町村合併合

併審議会を置いて市町村の合併計画の調査、審議、助言から時には勧告をも行った。

県が初め大津村に示した合併案は、大津・介良・稲生・十市の4ヵ村合併案であった。

昭和30年（1955年）4月、県の働きかけで4ヵ村の村長、議長の懇談会が持たれたが、大津村は「この合併の重要な目安である住民の経済生活圏が互いに相違する」との理由で拒否した。

昭和32年度高知市では人口25万人の構想で市庁舎を改築したが、これは高知市が将来的には大津村や介良村との合併を視野に入れたものと受け止めてよい。

2 合併の順調な経過

昭和36年10月、大津、介良両村から高知市に合併を希望する陳情書が出された。

37年7月に設置された高知市議会の「地域開発に関する調査特別委員会」は、翌38年に「大津・介良両村との合併は早期合併が妥当」という報告を出して、4月に解散した。

昭和40年6月、高知市は大津・介良村に対し、合併条件25項目を提示した。

例えば

1. 大津地区内で次の都市施設用地を確保するよう斡旋（世話）されたい。
 - (イ) し尿処理施設用地 16,500㎡
 - (ロ) 住宅用地 66,000㎡
 - (ハ) じん芥棄却用地 33,000㎡
2. 市道や指定幹線道路を広める場合は、用地は関係地区で無償で提供してほしい。市道に認定しない道路は、合併までに村道から除外すること。
3. 大津・介良中学校は統合を基本とし、これに必要な用地（13,200㎡以上）を確保してほしい。などである。

両村とも合併推進委員会を設置して、高知市から提示された25項目について検討したが、弱小の両村にとっては到底受け入れ難い難問ばかりであった。

そして昭和41年1月に高知市と数回会合をもって協議したが、市議会の一部から合併時期等について異論が出たため、合併論議は立ち消えになった。

45年3月介良村から、また12月に大津村からそれぞれ合併に関する陳情書が高知市に出され、それ以後合併問題は順調に進む。

46年2月に県と3市村で「合併事務研究会」が設置され、7月に県が仲介となって「高知市、大津村、介良村合併協議会」を設置する。そして8月に第1回の協議会が開かれた。

12月10日第9回協議会が開かれ、合併協定書に調印した。

この調印の席に参加した大津村の委員は次の通りである。

古田俊雄（村長）、田所 修（助役）、徳弘隆（議長）、池上隆道（副議長）、橋田稔（議会合併特別委員長）

12月11日、大津村、介良村はそれぞれ臨時議会が開かれ、合併案を議決した。

この日高知市では、第163回高知市議会に合併に関する議案「市村の廃置分合に関する議案」が出され、15日に議決された。その後、「財産処分」「字の区域の画定」「農業委員会の委員の定数」「高知市給水条例の一部改正」「高知市職員定数条例の一部改正」「職員の給与」「消防団」「墓地」などの議案を可決して、合併にかかる条件整備が整った。



昭和46年12月10日 高知市大津介良合併調印記念

3 高知市、大津村、介良村の合併成る

かくして昭和47年（1972年）2月1日、高知市、

大津村、介良村が正式に合併したのである。

この日大津では、支所の前庭に建立された「合併記念碑」の除幕式が行われ、学校では記念の植樹があった。

午後2時から大津小・中学校体育館で閉村式が挙行され、山地 林さんら101人の功労者に感謝状と記念品が贈られた。そして最後



は「はたるの光」を全員で合唱して大津村に別れを告げ、一抹の寂しさと高知市民となった喜びを持ち、大津の将来に大きな希望を抱いたのである。

この合併により高知市の行政面積は135.35平方キロメートルから143.12平方キロメートルに拡大し、人口は242,976人から256,801人(合併当時)に増えた。

この合併について、「稿本 高知市史 現代編」では次のように述べている。

「しかも、すでに東部の大津バイパス、南国バイパスは着工され、大津村には県営住宅（昭和31年）が建設され、私企業による宅地造成が進み、工場団地も出現、介良村では大規模な中野団地、横堀団地の造成がなされ、完全に高知市の都市的要素を担うに至った現実はさらにこの合併を決定的なものとした。このように47年2月1日の円満合併となり、両地区は南四国をリードする県都高知市の新しい大規模住宅地域、地場産業地域、食品工業地域として、その緑と多くの史跡を守りつつ発展していくことになった。」

2月27日に行われた市議増員選挙により、大津地区から古田俊雄（大津村最後の村長）、介良地区から鍋島 公の2氏が選出され、住民の日常身近な行政事務を取り扱う高知市大津支所、高知市介良支所が、それぞれ元の役場に設置された。

昨今、県下全域で市町村の合併に向けての活動が活発になっているが、昭和47年の高知市、大津村、介良村の円満な合併は、格好の教訓となるのではなかろうか。

（関公民館長）

高知市、大津村、介良村合併協定書

1. 合併の区域及び合併の形式

長岡郡、大津村及び介良村を廃し、その区域を高知市に編入するものとする。

2. 合併の期日

昭和47年2月1日とする。

3. 議会の議員の定数及び任期

議会の議員の定数及び任期については、市町村の合併の特例に関する法律（昭和40年法律第6号）第3条第2項及び第3項の規定により、高知市議会議員の定数を2名増員し、大津村、介良村の区域を区域とする選挙区をそれぞれ設け、増員選挙を行なうものとする。

4. 農業委員会の定数等

(1) 農業委員会の選挙による委員の定数は、市町村の合併の特例に関する法律（昭和40年法律第6号）第5条第1項の規定により、大津村及び介良村について、それぞれ定数を2名とし任期については同条同項第2号の定めによるものとする。

この場合において、大津村及び介良村の農業委員会の委員の互選により、高知市の農業委員会の選挙による委員として、在任する者を定めるものとする。

(2) 推薦による委員の定数及び任期については高知市農業委員会の推薦による委員の取り扱いによるものとする。

5. 特別職等の職員の取扱い

助役、収入役、及び教育長の取り扱いについては高知市及び大津村、介良村の長が協議して定めるものとする。

6. 一般職の職員の取扱い

(1) 大津村及び介良村の定数内の職員は、高知市の職員として引き継ぐものとする。

(2) 引き継いだ職員の給与、任用、配置その他の身分取扱いについては高知市の職員との均衡を失しない取扱いを行なうものとする。

(3) 高知市の職員となった者の勤続期間は、これを通算するものとする。

7. 行政機関等の設置及び組織

(1) 執行機関の組織については、大津村及び介良村の区域を所管区域とし、高知市の支所で取扱う業務を分掌事務として支所を現在のそれぞれの役場の位置に設置するものとする。

(2) 大津村及び介良村に置かれている附属機関については特別の措置を講じないものとする。ただし、合併後の高知市における附属機関の組織の構成に当たっては、両村の実情に応じた適切な措置を講ずるものとする。

(3) 大津村及び介良村に置かれている補助機関及び行政との関係で設置している住民機関、組織については、高知市の制度へ統合化ないしは編入するものとする。

8. 民生委員の引き継ぎ

大津村民生委員（児童委員）及び介良村民生委員（児童委員）は、現受持区域により高知市へ引き継ぐものとする。

9. 市税等の取扱い

(1) 市税の適用税率については、昭和47年度から高知市の税率に統一するものとする。

1) 固定資産の評価水準については、昭和47年度から高知市に統一する。

但し昭和45年以前建築分の家屋については、昭和51年度課税期までに高知市に統一するものとする。

2) 県市民税の個人の均等割については、昭和48年度から、法人住民税の税率については、昭和47年2月1日の属する事業年度分から高知市に統一する。

(2) 収納事務の取扱いは、高知市の制度に統一するものとする。

10. 国民健康保険事業の取扱い

大津村及び介良村の国民健康保険事業は高知市に引き継ぎ、高知市の制度に統一するものとする。

11. 国民年金に関する取扱い

国民年金に関する業務は、高知市の制度に統一するものとする。

12. 使用料、手数料、分担金等の取扱い

(1) 使用料、手数料は高知市の制度に統一するものとする。ただし、介良村における公営住宅の使用料については高知市と介良村の長が別途協議して定める。

(2) 分担金、負担金は、高知市の制度に統一するものとする。

13. 補助金、助成金等の取扱い

各種団体等に対する補助金、助成金等の財政援助については、原則として高知市の制度に統一するものとする。

14. 財産及び公の施設並びに負債の取扱い

- (1) 大津村及び介良村の財産（権利及び義務を含む）及び公の施設並びに負債は、高知市に引き継ぐものとする。
- (2) 財産に関する旧来の慣行は、合併後においても尊重するものとする。

15. 消防に関する取扱い

- (1) 高知市地域との関連で、消防上必要な位置に常設の消防機関を設置するものとする。
- (2) 大津村及び介良村の消防団は高知市消防団組織の基準により分団として編入するものとする。ただし当分の間、消防団員の定数及び施設については暫定的な取扱いとするものとする。
- (3) 消防団の団員の身分等については、高知市の消防団の取り扱いによるものとする。

16. 農業共済事業の取扱い

大津村農業共済組合及び介良村農業共済組合の行なう農業共済事業は合併期日までに大津村及び介良村において委譲を受け、高知市農業共済に引き継ぐものとする。

17. 一部事務組合の取扱い

大津村及び介良村が加入している一部事務組合はそれぞれ脱退するものとする。

18. 区域及び名称

大津村及び介良村の区域は、合併後の高知市の大字の区域とし、名称は大津及び介良とする。

19. 建設計画及び財政計画

合併後の建設計画及び財政計画は「高知市、大津村、介良村合併建設計画書」に定めるところにより実施するものとする。

20. 事務の承継

合併に係る事務の承継については、高知市、大津村及び介良村の長が協議して定めるところによる。

高知市と大津村及び介良村との合併について協議した結果、上記のとおり意見の一致をみたのでその証として署名する。

昭和46年12月10日 高知市、大津村、介良村合併協議会々長、委員

高知市長 坂本 昭	大津村長 古田 俊雄
	介良村長 鍋島 公
高知市議会議長 麻田 金光	大津村議会議長 徳弘 隆
	介良村議会議長 田内 英孝
高知市議会副議長 有沢 宗重	大津村議会副議長 池上 隆道
	介良村議会副議長 川田 定一
高知市議会総務委員長 杉村 善夫	大津村議会合併特別委員長 橋田 稔
	介良村議会総務委員長 武市 泰行
高知市助役 横山 龍雄	大津村助役 田所 修
	介良村助役 東山 豊久
高知市企画部長 奥田 精一	
高知県総務部長 斉木 敏夫	
高知県総務部地方課長 西尾 一雄	

市村の廃置分合について(高知県知事への申請)

A 260 ~ 1
昭和47年2月16日

高知県知事 前 岡 市 巳 殿

高知市長 坂 本

大津村長 古 田 俊

介良村長 藤 島



高知縣高知郡大津村長古田俊
高知縣高知郡介良村長藤島

市村の廃置分合について(申 請)

地方自治法(昭和22年法律第67号)第27条第1項の規定により
昭和47年2月7日から長岡郡大津村および介良村を廃し、その区域
を高知市に編入したいので別紙関係書類を添えて申請します。

高 知 市

(別 紙)

添付書類

1 廃置分合を必要とした理由および経緯の概要

- (1) 廃置分合を必要とした理由
- (2) 経緯の概要

2 高知市および大津村、介良村の議会の議決書および会議録の写な
らびに議決状況

- (1) 市村の廃置分合について
- (2) 市村の廃置分合に伴う財産処分に関する協議について
- (3) 市村の廃置分合に伴う経過措置に関する協議について
- (4) 会議録

3 廃置分合に伴う財産処分および経過措置に関する協議書の写およ
び合併条件等の協定の内容

- (1) 財産処分に関する協議書の写
- (2) 経過措置に関する協議書の写
- (3) 廃置分合に伴う協定事項

4 廃置分合に伴う経過措置に関する協議についての告示の写

5 現況表

6 関係図面

7 高知市建設計画書

高 知 市

合併当時の大津村

大津村の合併 ～大津村の時代を回顧する～

一柳 信幸

私は現在75歳。昭和41年、19歳の時に当時の大津村役場に入職した。今回、大津村が高知市に合併した経緯について、昔のことを思い出しながら、少しだが書いてみた。

【合併前の周辺の動き】

昭和32年3月、高知県知事から「後免町他6か村（香長村・岩村・野田村・岡豊村・介良村・大津村）は地勢・交通・産業・経済・及び社会的事業において緊密な関係にあり、基本的な地方公共団体としての機能の十分な発揮と住民福祉の増進を図るため、合併の必要性を認める」との勧告がなされた。

昭和33年4月、地方自治法の一部改正によって、市の人口要件に特例が設けられたことなどが大きな原因となり、合併に関する調査研究や討議の気運は、知事の勧告と相まってますます高まっていった。もちろん、合併賛成論ばかりではなかったようだ。

昭和34年10月、長岡郡4町村（後免町・香長村・岡豊村・野田村）と香美郡岩村、介良村の一部（伊達野）は合併し、南国市となった。これにより、合併しなかった大津村・介良村は長岡郡として飛び地で残った。北側には現在の大豊町・本山町が長岡郡として位置していたことから、長岡郡は南北に分断された形になった。

【大津村と介良村の動き】

大津村・介良村は、住民調査を行い、村議会でも討議を重ねた。当時の大津村長は、昭和26年から5期20年の大ベテランである徳弘勝氏であり、村政のすべてを知り尽くした人物だった。

当時、高知市は県庁所在地として戦後の復興を経て、発展途上の真ただ中だった。東に位置する大津村・介良村は、仕事や産業、経済、

教育、娯楽に関して、高知市に向かうことが多くなっていた。高度成長期の流れに相まって、大津村・介良村の発展は目覚ましく、食品団地や住宅団地が次から次へで、大津バイパスの工事も計画されていた。

当時、まだ若かった私のような職員には村の上層部の合併への紆余曲折は詳細に漏れ聞こえてはこなかったが、昭和32年の高知県知事からの後免町他6か村（香長村・岩村・野田村・岡豊村・介良村・大津村）への合併勧告を経て大津村・介良村以外が南国市になったことも影響し、大津村・介良村は高知市への合併に向けて水面下で動いていた。

昭和45年、大津村は県に「合併への要望書」を提出。その後、昭和47年2月1日、大津村・介良村（当時、2村の人口合計8,309人。面積合計10km²：高知市の都市計画2013より）は高知市に正式に合併した。大津村役場は昭和47年1月31日に閉所式を行い、長年の役割を終えた。

【大津村役場でのことを回顧してみる】

私が大津村役場に入庁したことを思い出してみた。

合併前の村役場は現在の大津ふれあいセンターの数十メートル東にあった。木造2階建てで1階には事務所と村長室、助役室があった。2階は会議室があり、村議会はその部屋で行われた。

当時、私は税務係であり、担当職員は2名だったが、税の仕事以外にもいろいろな仕事をした。時に村長や助役の外出・出張の際は運転手もした。土木工事の測量の手伝いもした。住民票等発行の手伝いや、村内で困ったことがあると現地に駆けつけるなど何でも屋だった。職員同士は助け合いながら和気あいあいと仕事をしており、村民との付き合いも和やかだった。役場職員は、村民の普段の生活も手に取るように知っていたし、小さな役場であるがゆえ村民が来庁しての用事は1回で終わ

る、まさに今でいうワンストップ行政、小回りがきく役場だった。

いろいろなエピソードを思い出す。

私は村の三役の秘書や運転手でしたが、ある時、村長を県庁に送っていった。そこで村長を待っていたのだが、いつまでも村長は現れない。すると車で待っている私のところに県庁の守衛がやってきて「村長はもう役場に帰っちゃります」という。私は、仕事が終わった村長を見逃してしまったのだった。

ある時は、村長を送迎した帰り、村長に高知市の繁華街でラーメンをご馳走になったこともあった。

現在の大津民具館の表札は、書家の高松慕真さんが書かれたものだったが、それは見事なものだった。高松氏のご自宅へ、村長が作った米と酒をもってお礼に伺うと、高松氏は仙人のような風貌だったが優しさに溢れていた。

収入役にいわれて、日本銀行高知支店へ公金を引き出しに出かけた。日銀の応接室に導かれたものの、なかなか金を渡してくれない。やっと受け取り、役場に戻ると、日銀から役場に「さっきの若造は本当に職員か？」と確認の電話がかかってきたことを聞かされた。今となっては苦笑してしまう思い出だ。

旧大津村に転入して55年

竹村(旧姓:川久保)雅澄

【茶山団地のこと】

私は、昭和42年12月上旬、高知市から長岡郡大津村鹿児の茶山地区に転入してきました。当時の茶山団地は、私の家を含めて4軒でした。

茶山団地は、かつて藩政時代に、この丘陵地に山内家ゆかりの茶畑があり、御殿山と呼ばれる場所もあったとかで、茶山団地と呼ばれるものとなったと話を聞いています。また、鹿児神社と紀貫之ゆかりの鹿児山にほど近く、明治時代に栄えた鹿児焼の登り窯が築かれていたところです。

茶山団地は、ミロク製作所が開発造成し、ミ

職員同士が助け合いながら村民にも助けられ、ワンフロアで仕事をしていたよい時代だった。

役場の事務所に勤務していた職員20余名(村立保育所の職員は除く)は、合併の時に誰一人辞めることなく、全員が高知市役所職員に身分を移した。当時の高知市の人口は256,801人(高知市の都市計画2013より)、大津村の何十倍もあった。小さな所帯の村役場から大所帯の市役所に勤務が変わるのは私も不安に思ったし、村の職員も皆、不安があったと思う。

その後、「大津会」と名付けた村役場出身の職員同窓会を毎年開催。役場時代の職員が集まり、昔話をして懐かしんだことだった。1名は病気で亡くなったが、他の者は定年まで高知市役所で働き、元気に退職した。「大津会」は長らく続いたが、そのうちに参加する者が少なくなっていき、寂しいことに平成20年代には集まることもなくなった。

令和の現代、あちこちの都市は近代的になり、文明も産業も社会も目覚ましく変わった。しかし、大津地区にはまだ自然も昔の面影も残っていて、道路や曲がり角、神社や畑を見ると、昭和の思い出が蘇る。今後、ますます大津地区は変化し発展するだろうが、これからも昔のよき思い出は私の中に残るだろう。

ロクの従業員(私の母も勤務)や関係者の他、一般の方々に分譲され団地が誕生しました。私が大津に来た時は、鹿児団地、鹿児東団地はまだなく、一面田圃でした。団地までは、電車通りから鹿児を通り小川に沿った一本道しかありませんでした。見通しがよく195号線を通る電車、バス、車などがよく見えました。田圃の畦、小川はまだ石垣が多く平成23年頃まで蛍が飛んでいました。とてもどかな地区です。

【合併当時の大津の様子】

合併当時、県道栗山・大津線も南国バイパスもまだなく、介良から195号線に出るには、今のメガネの三城の西側の道から鹿児公民館の下を通り電車通りに出ていました。朝夕多くの人達が行

き来し電車で南国市、高知市へ通学・通勤していましたが、道も狭く車が来れば学生の自転車は大変でした。私は、昭和45年から交通安全指導員として見守ってきましたが、苦勞しました。

舟入川の天津小学校から岩崎橋までの北岸は、土盛りの堤防で、所々に木が生えていました。川に降りる所がいくつかあり、子供たちが川遊びをしていました。舟入川は、昭和45・47・50年に集中豪雨や高潮により氾濫、また、'98豪雨で大きな被害がおきました。

'98豪雨後の河川改修で、堤防は補強され安全性は向上しましたが、子どもたちが川遊びをしなくなったことは寂しく思います。

また、舟戸には、役場の他、保育園、小・中学校があり、村の中心的な役割を果たしていました。現在、農協は舟戸、郵便局は北浦に移転していますが、当時は関にありました。金融機関は、農協と郵便局の2か所のため、他の金融機関に用事があるときは、南国市や高知市に行かなければなりませんでした。

【天津村役場のこと】

合併前後の天津村役場の様子を振り返ってみたいと思います。

当時、天津村の職員は、徳弘勝村長（昭和46年より古田俊雄村長）を含め30名ぐらいいたと思います。役場は、現在の天津中央公民館の所にあり、木造2階建てで、向かいに消防屯所、南側に公民館（ともに木造平屋建て）が一つの

敷地に建っていました。

役場の1階には、村長室、出納室、民生課（戸籍、住民票、年金、国保、衛生・清掃、選管、保育園などを所管）、総務課（秘書、庶務、税務、統計、交通安全、消防、議会などを所管）、事業課（水道、建設、土木、農業委員会などを所管）、教育委員会があり、2階には、議場、会議室、休憩室がありました。公民館には、用務員室と保健婦室があり、保健婦室には、天津と介良両村担当として県職員が駐在していました。

合併後、旧天津村役場は高知市天津支所となり、初代の支所長は、旧天津村助役の田所修さんでした。

役場の職員は少数でしたが、みんなが協力し合って、日常業務や山火事、台風災害に対応していました。

合併後は、役場、農協、郵便局の職員、議員、教育委員、農業委員が集まって年1回交流していました。また、役場職員だけの交流も行なっていましたが、今はこうした交流会もなくなりました。

※ 天津支所は、昭和61年12月に現在のふれあいセンターの建物に移転した後、平成13年6月に廃止になりました。

7月から、住民票、戸籍等の窓口事務は、「ハイパープラザ（現ナンコクスーパー）天津店」内に新設された「高知市天津窓口センター」で取り扱っていましたが、平成22年9月30日に閉所となりました。

天津教育振興会の 設立とともに歩んで

一般財団法人天津教育振興会 顧問（前理事長）
岡崎 洋一郎

1 設立発足初期と経過

昭和46（1971）年天津村と高知市との合併を視野に、徳弘勝村長提案第9号〈村財産の譲渡について〉の審議が村議会において行われ、同

年3月12日財団法人の設立が決議された。

県教委認可に向けての対応と諸準備が進み、昭和46（1971）年10月26日高知県教育委員会指令46教委総第308号にて『天津地区の教育文化の永続的進展と郷土文化の保護育成に寄与する』ための財団法人〈天津教育振興会〉が認可され、11月19日設立した。

当時の世話人諸氏は、村長、助役、収入役、村会議員、教育長、教育委員、小中学校長、

PTA会長等で、財団法人理事長は徳弘勝氏、常務理事は坂本睦男氏とその他の役員が法人運営に当たった。

当時28歳の私は、旧大津村教育委員に就任していた関係で、法人発足前の設立準備メンバーに加わり、発足時から役員として財団の運営に関わった。

2 財産と50年間の運営

この財団法人は、当時の村庁舎に隣接する土地（大津乙958-4 189.06 m²）と既に建築していた木造スレート葺平屋（床面積42.64m²×2棟）及び基本財産100万円の基金を大津村より譲渡を受けて設立発足した。

2棟の家賃収入を財団の果実として、大津地区内における学校教育、社会教育面での活動を助成支援することとし、役員はすべて無給とした。



設立当初の役員 昭和48年5月15日

今日に至るまでの50年間、毎年の果実の中から（約30万円～50万円）地域の教育と文化・スポーツ等の活動に支援や助成を続け、地域活動にとって重要な役割を果たしている。

しかし、長年の間には、入居者が転居し数か月空き家になる、また、家賃滞納が続き裁判所での調停やトラブルの対応に苦慮した事例もある。

特に平成10（1998）年の'98豪雨では、大津地区が水没被害を受け、貸家2棟も水没し家賃収入が途絶えた。幸いにも水害では保険金（220万円×2棟）による家屋の改修を実施し、新たな入居者の家賃収入としての果実を得ることができた。

3 これまでの改築基金積み立て

'98豪雨災害で改修された2棟の貸家は、この時既に築36年の建物で、全面改築も検討された

が、手持ち資金も少なく、内装だけの修繕を保険金で対応した。今後もこの財団法人の目的を維持継続するために、建物の改築等の対応が必要となり、備える基金として、果実の中より毎年僅かながら想定積立金約2,000万円の確保に心がけた。

4 法人継続と改築計画の課題

その後、平成21（2009）年～24（2012）年の間、県の指導もあり、新法人設立に当たり、5年～10年後の改築の展望については、次のような①～③案を理事会、評議員会で検討することとした。

- ① 現在地にはほぼ同様の平屋2棟の建築は建築基準法上無理があり、高床式改築案
- ② 現土地を売却し移転、貸家の建築又は駐車場案
- ③ 用地売却で得た資金での運営に移す案
いずれの案を選択するかにあたっては、法人の目的を維持し継続することを必須事項とした。

5 用地売却による資産運営に移行

前段でも県教委の指導にふれたが、平成21（2009）年から数年をかけて、県内に所在する各種法人の洗い直しがあり、休眠的法人や財産保全状況、規模の全面的な調査と指導が実施された。この指導等に合わせ大津教育振興会も厳しく対応を迫られたのである。

当法人も数年をかけて対応したが、最終的に平成28（2016）年10月の理事会、評議員会で、資産の土地売却処分案が承認された。

同年12月手順を踏んで入札、売却先の決定や用地境界確認の上、建物2棟は無償で現状のまま譲渡することとし、平成29（2017）年3月18日売買契約を締結し、3月29日売却を行った。

このことにより、平成29年度からは手持ち現金管理運営に移行し、毎年50万円前後の助成事業を視野に運営することとなった。

6 合併50周年までの助成状況

初期から20年程の間には、毎年（1万～3万円）

の助成を通年実施と合わせ、年により特別助成5万円以上をピックアップすると、下記のような助成がある。

少年サッカーテント 中学校野球部
小学校書写大会 小学校教育研究
合併20周年記念誌 バレー全国大会
花いっぱい会 小学校プール備品
小学校研究大会 小学校合同音楽祭
小学校沖縄研修 小学校防災パンフ
中学校女子マラソン全国大会

小学校バスケ全国大会 大津児童公園助成
学校林整備助成 少年サッカー全国大会

以上のように、引き続きこれまでの50年を通じて継続事業への助成の実施や、新たにおおつ祭りや子供達のよさこい踊り等の助成、合併20年後より実施された大津文化祭や文集おおつ(現 文芸おおつ)への助成も行った。

ただし、50年の間には、豪雨災害やその他で文化祭実施の見送り、近年では、コロナ禍によりイベント等の中止で助成金不要とした年もあるが、50年間の助成金総額はおよそ1,500万円になろうか。

7 今後の振興会の展望など

大津教育振興会は、大津/高知市合併50年の歴史の中で、大津地区の様々な変化に対応しつつ歩んできた。私事ではあるが、文化等の助成事業<文芸おおつ>の編集では、「私のおおつ鳥瞰」と題して、地域変化の事例や足跡を捉えた記録を当法人の理事長として掲載を心がけた。

振り返れば初期から法人50年の歳月を、歴代役員諸氏の心強い協力のもと、長期運営ができたことに感謝している。

令和新時代の理事長刈谷好孝氏、常務理事濱田敏裕氏、他役員諸氏の今後に期待したい。現役員一同が<大津教育振興会>設立の目的と、趣旨の基軸に合致した資金運用と助成で、今後の地域発展に貢献してほしいと願っている。

財団法人大津教育振興会設立当初の役員名簿

理事長	徳弘 勝
常務理事	坂本 睦男
理事	徳弘 隆 徳弘 政幸 徳弘 巖 依光 重利
監査	岡崎洋一郎 橋田 稔
評議員	高村 泰彦 松岡栄次郎 田所 義喜 山地 太郎 津野 計年

大津の農業

高知市農業協同組合 大津支所の歩み

支所長 杉村 多穂

【高知市農業協同組合大津支所の歩み】

高知市農業協同組合大津支所の歴史は、大正11年までさかのぼる。

大正11年9月、産業組合法により、「保証責任大津村信用販売購買利用組合」が設立されたのが最初である。

出資金は、1口20円、組合員300名で、事務所は大津村役場に置き、金融部門の信用事業

のみ行った。

また、利用(購買)事業は、大正14年に開始し、関(長岡郡大津村甲1272番地2)に事務所を置いた。

昭和15年には、農業団体法の規定により保証責任大津村信用販売購買利用組合は解散し、村農会と合体し「大津村農業会」となったが、これも昭和23年6月に解散となり、新しく「大津村農業協同組合」を設立し、事務所は、関(長岡郡大津村甲1272番地6)に置いた。

大津村農業協同組合は、婦人部、青壮年部があり、日用品の共同購入、貸衣装、肥料の共同計算、土壌検定等を行い、農業経営を側面から支えた。

昭和47年2月に高知市と合併したことに伴い「高知市大津農業協同組合」に名称変更となった。

農業協同組合（JA）は、将来の農業環境変化等へ対応すべく『地域に根ざした農業協同組合』であるよう、昭和60年7月、高知市農協合併研究協議会を発足させ、合併への幾多の障害を乗り越え、高知県8JA構想の先陣として、高知市、土佐山村、鏡村の1市2村・14JAの広域合併が実現し、「高知市大津農業協同組合」から「高知市農業協同組合大津支所」となった。

なお、大津支所の管轄区域は、旧大津村の範囲であったが、経営基盤強化に向けたJA高知市施設再編計画により、令和2年2月に布師田支所が廃止になり、大津支所の管轄区域になった。

現在の組合員数は、大津1,461人、布師田444人、合計1,905人となっている。



旧 高知市農業協同組合大津支所



旧 高知市農業協同組合大津支所

【事務所移転】

平成10年9月24日未明から25日にかけての「高知豪雨」で大津地区は甚大な被害を受けた。このため、国分川、舟入川において激甚災害対策特別緊急事業が行われることになり、事務所も移転せざるを得なくなった。

新しい事務所は、地理的に大津の中心的場所である舟戸地区（大津乙904番地1）へ移転することになり、平成13年2月5日、新築移転した。なお、大正15年に開設した田辺島出張所は、平成13年1月末で廃止した。



現 高知市農業協同組合大津支所

大津の農業

野島 永廣

私は、もうすぐ84歳になります。農業高校を卒業し就農してから合併前後までの大津の農業について記憶をたどり、思いつくまま紹介します。

【二期作】

当時の大津は農村地帯で、二期作が盛んに行なわれていました。4月に田植えをし、8月に収穫し、その後すぐに二期作の田植えを行ない、11月に二期作の収穫をしていました。

農作業はまだ機械化されておらず、田を耕すには牛を使って「田おこし」をしていました。最初には牛鋤で土を鋤き、その後馬鋤で整地をしました。

それが終わると田植えですが、家族だけでは人手が足りず近隣の女性2~3人に来てもらい田植えをしていました。

当時、1人が1日1反（10a）植えるのが普通でした。田にヤマ（※1）を1m50cm間隔に何本も引き、その間に腰をかがめ、右足の右に2株、左足の左に2株、足と足の間に2株植え、後ずさりに植えていきました。

田の草取りは大変な作業です。当時は、除草剤などはなく、手で草を引き土に埋めていましたが、草取機が入り随分楽になりました。草取機には、回転する爪が付いていて、稲株と稲株の間を前向きに押し土を混ぜ、草を土に埋めていきました。私は、中学生の頃より草取機を使って家の手伝いをしていました。

次に病害虫の消毒ですが、ホリドール、パラチオンなどがありました。手回しの散粉機で田の中を何往復もしました。その後、動力の散粉機に変わり一度に4m巾ぐらいを散布できるようになり、さらに、ナイヤガラホースに変わり片方を1人が持ち2人で広い田でも一気に散布ができるようになりました。

さて、8月の稲刈りと二期作の田植えですが、農家では1年で一番忙しい時で家族では人手が足りず、二期作地帯以外の地区から男性(鎌棒：かまぼう)2人、女性(秋仕：あきし)2人ぐらいを雇っていました。

稲刈りは、鎌で1株1株刈り、日の出から始めて昼までに3~4反を刈りました。昼からは前日刈った稲をイソ(※2)で束ね、サス(※3)という棒で担ぎ道端まで運び、リヤカーで作業場まで取り込んでいました。

3~4日で刈り取りが終わったら次は二期作の田植えですが、刈り取った後の田に水を張り一期作と同様、牛を使って牛鋤ですき、馬鋤で整地をして田植えをしました。

8月の農繁期の時期には、各地区で給食を行っていました。昼食、おやつ、夕食の3食を非農家の女性に来てもらい各地区の共同炊事場で作り、家族の分と雇人の分を炊事場まで取りに行っていました。

一期作の稲刈りと二期作の田植えが終わると雇っていた人には帰ってもらい、自分の家族で作業場に取り込んでいた稲の脱穀作業です。できた粃(もみ)は、ムシロ(※4)に広げ天日干しにして乾燥させました。

次は、粃摺りです。粃摺りでできた玄米は冬場に準備しておいた米俵に60kg入れて出荷していました。米俵の後にできたのが60kg入のカマス(※5)でした。現在は30kg入の紙袋が変わっています。

二期作の稲刈り、脱穀、粃摺り、出荷は家族で行っていました。

農閑期には、土木作業に行ったり、他の地区の園芸地帯でハウスの暖房に使うコモ(※6)を請け負って編んでいました。

- ※1 ヤマ：細い麻紐。太めの糸。紙鳶(たこ)の糸。
- ※2 イソ：刈り取った稲を束ねるために、数本のわらの穂先を結び合わせて作ったくくり縄
- ※3 サス：両端を尖らし、稲束などを突き刺すようにした担い棒
- ※4 ムシロ：がま・わら・竹などで編んだ敷物
- ※5 カマス：ムシロで作った袋
- ※6 コモ：あらく織ったムシロ



写真 左：牛鋤、中：馬鋤、右：草取機 (大津民具館所蔵)



昭和30年代の田植え風景(山本貢氏提供)

【大津の園芸】

次に大津の園芸についてですが、合併当時は田辺島、鹿児島で数名がハウスでトマトを作っていました。数年後、北浦でも4~5名が始めました。出荷は共同で、田辺島の出荷場で地元の女性を雇い、木箱にモクメンを詰めて大阪、京都の市場へ④のマークで出荷をしていました。

当時のハウスは、木の杭を立て孟宗竹を5cmぐらいの巾に割ったものを屋根の骨組みにしたハウスでした。温度管理は、冬場の寒い時期はワラで編んだコモをハウス全体に掛け、中の作物が凍らないように管理していました。夜中に雨が降り出したらコモが濡れるため、夜中でもコモを剥ぎに行きました。

合併当時の農業などを ふりかえって

田所 隆雄

【二期作後のトマト栽培】

大津村と高知市の合併当時の農業は早稲だけでなく、オソノイネ(遅稲)で稲を栽培していた。そして、裏作として菜種油を取るナタネやソラマメも作っていたので、年に3回作物を植え付けしていた。とにかく、年に2回米を栽培する二期作は要するに食糧増産の目的でやっていた。

ところが、その後食糧の増産がそれほど必要でなくなり、二期作もちょっと下火になった時点で、効率の良い収穫のいいものをと考えて、ハウス栽培を始めた。食べる物ではトマトが中

その後、ハウスの構造は、パイプハウス、鉄骨ハウスに変わり、夜間の暖房に灯油、重油を焚き、作る作物もトマトからキュウリ、ナス、ピーマン、アスパラガス、ミョウガなどと変わっていきました。最盛期には、米と同等の金額を売り上げていましたが、生産者の高齢化、後継者不足等で衰退してきました。

現在では、ミョウガ、アスパラガス、花、トマトなどで大津の園芸品は構成されています。

昭和50年前後の米価は、米価運動で地元国会議員に陳情に行き、60kg当り18,000円から20,000円ぐらいしていましたが、米の消費が減少し米余りとなり、現在では飼料米とか他の作物への転作を余儀なくされています。園芸についても、現状維持が精一杯です。

今後の大津の農業については、稲作では、農地の集積と専業農家規模拡大で所得をあげて行くこと、また、園芸については、若い後継者が農業所得のみで生活が成り立っていけるよう農業が儲かる産業になっていってほしいものです。

以上、昔を思い出すがままに筆をとりました。

心だった。

大津の近くの高須の市場でも私のトマトは良い値がしていた。ところが、その高須の市場が閉鎖されるようになって、高須の市場の社長が、「大手青果の社長の要望で買いゆうがやき、中央市場(中央卸売市場)へ行きゆう家内に、中央市場にトマトを置かすようにゆうちよききに。」とってくれた。

それで、最初に中央市場へ持っていったとき、薊野のトマトのところへ置いていたところ、「兄さん、兄さん、そこに置いたらいかん。そこは薊野のトマトを置くくじゃ」と。「それから兄さん、トマトは8キロ入れてきてよ。」といわれた。私は4キロ入れていたのだ。

それから、まだ高須の市場の社長が残務処

理をしていた時、「社長、こうこういわれた。」
といたら、「それはいかん。家内にもう一回いわせちよき。」とのことで、明る日、中央市場へ行ったところ、「おまさんくのトマトは薊野のトマトのこっちへ置き。」「やっぱり、あんたんくのは4キロ入れてきてくれ。」ということになった。

県内大手青果の社長さんが買っているということで、中央市場も台頭する仲買さんがおり、互いに競い合っ、あの時分に4キロのトマトが7,000円したこともあった。

それと、中央市場の周りはずも車で行ったが、私の車が来たら、「あ、来た来た。」といて、仲買人も競り人も私の車へ来て、全部持っていってくれるという有難いことをしてもらったこともあった。

県内大手青果の社長さんは、「薊野のトマトはやりこい(軟らかい)き、いかん。あんたんくのトマトは固いき。」といてもらった。

トマトの品種は一緒で、苗は普通の苗を買っていた。その田んぼは塩が出てくるころでものすごい塩分が高い。地下水の塩分が高かった。このあたり一帯は昔から大「津」というぐらいで、海のそばだった。その関係で潮が引いて陸になった後もやはり塩分が多い土地になったのかもしれない。そういう土地のため、自然と固い美味しいトマトになったのだろう。懇意の人が、「一枚他の田んぼがあってやってみたけど、お前んくのトマトのようにどうしてもならん。」といていたことがあった。

その後、ちょっと形が変わった大きなハウスを建て出したところ、県内大手青果の社長さんが、「おまさん、大きなハウスを建てようということじゃが、トマトをやめますか。」と尋ねてきた。また、「ぜひトマトを作ってくれんろうか。私が全国に販路を開拓したい。」といてくれたが、ピーマンの地域での共同栽培のためにビニールハウスの計画があったので、トマトの栽培

をやめてしまった。

【花の栽培】

合併の頃、大きなビニールハウスを建て、地域の農家が植え付けをするピーマンの苗を育てていた。自分の土地なので費用は全部自分が出していたが、だんだんの人が、「田所さんに迷惑をかけるきピーマンはやめろじゃいか。」ということになった。それで花に切り替えることになった。

ハウスは半分壊したが、残りの半分で現在も花を栽培している。芸西でも栽培していた宿根スターチスの一種であるブルーファンタジアを6年以上前から栽培している。一年中採れ、毎年植え直しの必要がなく、県外出荷で静岡のほうへ出荷していた。手のかからないものを栽培したいということで始めた。

消毒は必要だが、夜間の照明はしていない。10本を一把にして出荷していた。当時一本400円で、結構良い値段だった。ところが、値段が急に下がってきた。品質が悪くなったのではと思、高知の園芸連で調べてもらった。品質には全く変わりはないが、ただ前のような値が付かなくなったとのことだった。

今は変わったものが好まれる時代、新しい品種が沢山になり、仲買人も親の代から子の代になってしまったの違もあるという。品質には問題はないという答えが返ってきたが、それで県外出荷は辞めた。

その上、花も新型コロナウイルスの影響で宴会とかパーティー等がなくなった。花屋さんも花が売れないので困っているという。今後は農業を子どもに任せていきたい。

【農業振興地域として】

田辺島通の電停の真南のところに私の家や田畑がある。舟入川から近く、鹿児島神社の南のあたりで、そのあたりは全部田畑だった。だんだん埋まってきているが、今も田畑が多い。実は農業振興地域ということで、今でも家もなか

なか建てられない。他への転用もできない。仮に駐車場でも作りたかったら、市、県へ許可の願いをして、しかしなかなかすぐに許可が下りてこない。そんな規制が今もあるところで、他の人に簡単に土地の売り買いができないようになってきている。

以前は鹿児の南には建物等は何もなかった。そのちょっと西へ行った新木付近も田んぼばかりだったが、最近では家がいっぱいになってきた。農業振興地域でないところは、どんどん変わっていった。

【竹筋コンクリートから鉄筋コンクリートへ】

高知市と合併するより村としてやったほうが税金も低かったのではないか、個人的な収入は合併するより村の時代でやっていったほうがよかったがじゃないか、という話を聞いたことがある。

これも私ところの問題だが、戦争中に食糧増産をするため、湿田地帯に専用の水路を作って、そこで麦や米を栽培するという計画があった。

私の親父の代、戦争中の昭和17、18年と続けて、村が工事をするようになったが、鉄筋の鉄がないので竹を鉄筋の代わりにして、鉄筋コンクリートならぬ竹筋コンクリートで用水路を作った。私の田んぼと隣の田んぼの間に、長いものは100mぐらいあった。その用水路の水を使って麦を植えたり、油を摂るために菜種を植えて食糧の増産をしていた。

合併当時は農家と市の職員とで話し合いをしながら農業を行っていた。竹で工事をしているため、その改修も高知市の職員がしてくれた。今の市の職員は地元の者と酒を飲んだりすることはできないが、その時分は平気でできた。

地域の人とつながりを持たなければということもあったと思うが、大津地区の農業関係の人々との交流会のようなものがあった。「また、あその工事をやってや。」と頼んだりすることもあった。

合併後もそういう関係があって、高知市役所

とのつながりがあった。ある市の職員は、ちょうど私より20歳下だったが大変懇意で、退職時には、「えらい本当に長いことお付き合いいただいて。」とあって、挨拶に来てくれた。その職員とは特に個人的にもうまくいっていた。当時は、市の職員とも連携が十分できていた。高知市との合併の頃、竹筋コンクリートの用水路が傷んであっちもこっちもが破れだして、すぐにはいかなかったが、その職員が用水路の竹筋を鉄筋に替える工事をしてくれた。

【大津地区の伝統と言い伝え等】

先祖祭りを家の中にはしないようになって、もう10年ぐらいになる。

以前は、家族に誰がいるとか、お孫さんとか、ちっちゃい子どもが大きくなったねとか、そういうことも分かっていた。それが最近なくなったので寂しくなった。今は飲み屋さん等でするようになってきた。コロナのためあまり集まることもなくなってきた。

昔は家で料理を作ったり、皿鉢を取ったりして先祖祭りをしていた。人間のつながりのある大津の伝統がずっと続けば一番なのだが…。

田辺島通の電停を南へ入ったすぐ左手に、田所一族の守り神としての田所神社がある。最初は鳥居が木製だったが古くなったため、石の大きな鳥居に建て替えた。

鹿児神社も北向きなので面白いと思う。航行の安全を願って舟からお参りできるように、北向きにしたという話は聞いている。その近くの御殿山に山内神社があった。御殿山というのは今の茶山。今の茶山の東側が山で、ちっちゃな祠がある。山内のお殿様のお妾さんがそこに住んでいたという。近くでお殿様が落馬し、それで鹿児神社を北に向けろといったという。これは作り話だろうが、そんなこともいわれていた。幼い頃から、御殿山、御殿山と聞いていた。

また、その下のほうから、粘土質の土が出ていて、鹿児焼という焼き物が行われていた。

合併から50年 大津の今

健やか大津の子

大津保育園の歩み

園長 山岡 美賀

近くには岩崎山があり、自然豊かで静かな住宅地の中にある大津保育園。1歳未満児クラスから5歳児クラスまであり、現在の園児数は126名である。

健康な心と身体をつくることを目標に、十分に遊び、丈夫な体をつくることや、基本的な生活習慣を身につけること、いろいろなことに興味をもち自分でやろうとすること、自分の思いが素直にだせるということを大切に保育をすすめている。

大津保育園は、昭和29年4月に大津村立大津保育園として設立された。旧大津村は都市郊外の農村地帯で、米の二期作、イ草刈りなどの農繁期で保育の必要性が認められ、保育園が開設された。

定員90名からの始まりだったが、昭和47年の2月に高知市に合併され、高知市立大津保育園となる。昭和48年に新築移転、入園希望者が増え、プレハブ保育室を増設し、定員180名となった。

しかし、昭和55年をピークに、その後は園児数が減少の一途をたどり、昭和57年に定員150名に変更し、今に至っている。

平成29年5月に現在の新園舎に移転、その翌月には、子育て支援センター「大津・にじいろひろば」も併設された。地域とのつながりを大切に、68年の歴史がある大津保育園である。

また、その間に幾度となく水害を経験してきた。記憶に新しいのは平成10年9月の大水害で、職員室の床上85cm、調理室は125cmまで浸水したという当時の記録が残っている。

復旧作業のために、他園の公立保育士や退職した方、当時の保育母子課職員、一般ボランティア約100名の方が参加をして下さった。被災した園児の家庭も多くあり、臨時託児所を開設しながら、復旧作業をして保育が再開できた。そこには、子どもたちの元気な声と笑顔があふれ、保育園に活気が戻った。困難な中でも人とのつながり

や温かさを感じとることができる時代であった。

しかしながら、現在新型コロナウイルスが世界中に感染拡大したことにより、ここ数年は、地域の方との交流もできなくなり、保育園で行ってきた行事も中止や規模縮小となった。マスク生活で保育士の表情を子どもたちに伝えることが難しくなり、密になって遊ぶことや異年齢交流など、保育園生活で大事にしたいことが思うようにできない現状である。

そのような中でも、できることはないか、子どもたちにこんな経験をさせてあげたいと保育を見直し、できる活動を行っている。保育園としても感染拡大を少しでも抑えていけるよう、感染対策を行う日々である。

今年度、久しぶりに夕涼み会を開催することができた。一部と二部に分かれ、人数制限のある中で、内容も従来の夕涼み会のようにはできなかったが、年長児の竹太鼓や全園児の盆踊り、ゲームなどを行うことができ、保護者の皆様にも親子で楽しむことができたという感想を沢山いただいた。

コロナ禍で行事もなかなかできなかったが、やはり、保育園として感染対策をしながら少しずつ以前の生活を取り戻すことができるようにしなくてはいけないと感じることができた行事だった。

時代の移り変わりとともに保育園も変化をしてきたが、いつの時代も子どもたちは、私たちの希望である。子どもたちは、保護者からの深い愛情を受け、地域の人々から温かいまなざしで見守られて健やかに育ってほしいと願う。

大津保育園の歩みが次世代へ受け継がれていけるようにしていきたい。そして、大津保育園が地域の保育園として信頼され、大切な存在であるよう、子どもたちが明日も保育園にいきたいと思えるような保育園を目指して、職員一同努力していきたい。今後も地域の皆様、保護者の皆様とともに歩んでいく大津保育園でありたい。

心豊かにいきいき輝く 大津の子

大津小学校 校長 岡林 宏枝

大津小学校は、現在児童数534名、23学級で、高知市東部では最も児童数の多い学校になっています。

☆学校経営理念

- 「チーム学校」の構築
- 厳しい環境にある子どもたちの支援
- 「地域との連携・協働」
地域と共にある学校 大津
- ブレのない教師の姿勢を保とう

☆学校教育目標

かしこく やさしく たくましく

☆めざす子どもの姿

- I 自ら課題を見つけ、思考・判断し、表現できる子ども
- II 互いのよさを認め、協力し合える子ども
- III 失敗を恐れず、粘り強く挑戦する子ども

☆研究主題

「学びを楽しむ子どもの育成」
～思考・表現を大切に
した授業づくりを通して～

◎子どもたちが誇れる学校 それが大津・・・ この良き伝統を受け継ごう！

この思いで、教職員は、日々子どもたちと関わり子どもたちの幸せを願い取り組んでいます。

本校の児童会でも、「大津家はみんなの家族やき」を合言葉にして、児童会が主体的に様々な取組を行っています。

大津地区は、農業・商業・特色ある産業が盛んな地域です。また、大津地区を愛する方々により、多くの地域団体があり、人と人とのつながりも深いです。そんな温かな地域である大津のよさを子どもたちに伝えたいという思いがあります。

高知市との合併50周年を記念して、「生活科・総合的な学習の時間」の学習から、特に地域の

方々から学ぶことが多かった学習を紹介します。
※コロナ禍中は、できなかった学習もあります。

☆全校のテーマ：地域と関わり 地域で学ぶ 【1年生】

○地域の方との交流会

「昔あそびを一緒に楽しもう」

大津地区老人クラブ連合会会長の藤岡省次さんが中心となり、地域の方や高齢者の方に学校に来ていただき、昔遊びを教えてもらっています。

独楽のひもの巻き方やお手玉、あやとりや竹馬など、優しく丁寧に教えてもらえるので、子どもたちも楽しみながら、遊ぶことができます。



○年長さんとの交流会

「水のおもちゃで一緒にあそぼう」 9月

「秋のおもちゃで一緒にあそぼう」 12月

地域の保育園の年長さんを招待して毎年行う行事です。

外遊びが活発になる1年生の2学期に、水に浮かべて遊ぶおもちゃや、魚釣り、金魚すくい、まとあて、シャボン玉遊びなど、自分が年長さんとして遊びに意欲的に取り組んでいる様子が見られました。



「なつだ あそぼう」

12月には、「あきをさがそう」の学習で、各自が身の回りで集めてきた木の実や自然のものを使って作ったおもちゃや楽器で、2回目の交流会を行いました。

交流会の前に2年生に招待してもらった「おもちゃまつり」をお手本にしたので、年長さんに対して、どのグループも上手に説明や関わりができていました。

【2年生】※コロナ禍により内容に変更あり

○地域たんけん学習

「どきどきわくわく まちたんけん」 1学期

「もっとなかよし まちたんけん」 2学期

子どもたちは、自分の家の周りや通学路にあるお勧めの場所や店などを学級で紹介し合い、地図を作り、さらに知りたいことや行ってみたいところを考えます。それをもとに、見学する店や施設を決め、自分たちで学習のめあてや質問を考えて訪問します。訪問先は、年によって違いますが、ふれあいセンターや駐在所は、毎年お世話になっています。

「まちたんけん」を通して、子どもたちは、仕事をしている人の思いにふれ、働く人に親しみを持つことにより、大津のことが好きになっていくのだと思います。



【3年生】

★テーマ：やさしい町 大津

～みんなが安心してらせる町づくり～

○体験してみよう

「ほおっちょけん学習」高齢者疑似体験

大津地区社会福祉協議会のご協力をいただき、子どもたちが実際に、装具を使ってお年寄りになってみる体験学習です。体験を通して高齢者のことを知り、高齢者の立場に

立って考える学習は、お年寄りとどのように関わっていけばよいかを考える大切な機会になります。

最後に、地域の方々が劇を通して、社会生活で必要なマナーを示してくださいます。

子どもたちは、地域に自分たちのために活動してくれている方々がいて、その方々に守られていることに気づくとともに、自分たちも大津の一員なんだということに気づきます。



【4年生】

★テーマ：ふるさと発見・未来へ発信

～高知のえいもん見つけたい～

○こじゃんとえいもんもりだくさん

4年生では、地域のよさや宝物について、自分のテーマを追究しながらリサーチ活動の方法を知り、高知のえいもんを発信する学習をしています。子どもたちが見つけた「大津のえいもん」は、ミレービスケットの野村煎豆加工店やフラフづくり、お米の「よさ恋美人」等でした。

テーマ設定→グルーピング→課題追及→中間報告会→調べ直し→プロジェクト（計画・実行）の手順で学習を進めます。

自分が興味を持った「えいもん」をリサーチすることで高知のよさやそれに携わる方々の苦労や願いを知ることができました。多くの方との関わりのお陰でふるさとのよさに気づきました。



【5年生】

★テーマ：共に生きる

～伝えていこう 地域のほこり～

○「知ろう！米文化」社会科の学習と関連して

はじめに、JAの方や地域の山添さんから米の品種や品種改良の仕方、稲の病気や育て方、米作りの楽しさや大変さを教わります。そして、地域の竹村さんの水田をお借りし、田植えや稲刈りの体験学習を行います。その間、稲の成長を観察したり、調べ学習を行いながら、食育を意識した「米」の学習を行います。自分のテーマで学習したことを様々な形で発信します。

コロナ禍以前は、JA女性部の方に味噌づくりを教わり体験していました。学校行事等でお米やお味噌を売ると、「やっぱり大津のお米はおいしい！」とうれしい感想が届いています。地域農家の方には感謝です。



【6年生】

★テーマ：みんなの未来

～大津のまちの幸せを考えよう～

○「災害に強い町、大津」

1998年9月の豪雨により、広範囲で水没した大津地区の歴史から、6年生では防災学習『災害に強いまちづくりプロジェクト』に取り

組んでいます。防災参観日には、大津地区地域防災会会長の濱田さんや日赤大津分区をはじめ、地域の方々に協力していただき多様な活動を行ってきました。

クロスロード・ハグの授業や6年生主体の避難訓練等により、自分だったら何ができるかを考えます。

1年生から学習してきた防災学習や調べ学習、修学旅行での見聞を通して、国語科で学んだ「バックキャストイング」の手法を用いて、大津の未来の理想を想像し、今、自分たちが考えなくてはいけないことやできることを調べ、深め、「防災プレゼン」としてまとめています。

アウトプットの間として、学習してきたことを地域の方や保護者、下級生に発表する年もあれば、大津と環境の違う地域に住む6年生と防災学習の交流会を行う年もありました。

子どもたちが主体的に問題を解決する資質や能力を育成することを目指し取り組むことにより、自助の視点だけでなく、共助の視点で学習を進める姿が見られるようになっていきます。

大津小学校の子どもたちの学習に向かう姿勢は、校外の方々から高い評価をいただいています。それは、温かな地域や保護者の皆様に見守られているからです。これからも、かしこくやさしくたくましく、共助の心で未来を切り拓く人に育ててほしいと願っています。



大津賛歌 ～初めての赴任から～

大津中学校 校長 須内 康雄

変わりゆく時代の中で、
変わらず残る舟入川
紀貫之が船出したこの地は、昔とは大きく変わり、

たくさんの方々家が建ち並ぶ
川も舟が通ることなく、
静かに流れている

自分を澄んだ心に導いてくれる、
なつかしい景色
これから見られなくなってしまう・・・

と思うと、あらためて見つめ返す

心に秘めながら、

この地を去ってからいつか帰るあの日まで

去り行く日

「いつかまたね」

と舟出する

私は、この4月に大津中学校に着任して半年余りが経つが、本校に通う生徒の姿に、地域の民度の高さとその中で育まれる子どもの素晴らしい感性や個性、文化の香りの高さを感じている。

今、お読みいただいたのは、令和2年度の国語科での取り組みである、松尾芭蕉の紀行文『おくの細道』ならぬ、「大津の細道」という題材で、芭蕉の紀行文を学び、その書きぶりなどを参考として大津中学校の3年生が取り組んだ作品成果物の一つである。

地域を愛し、史跡をモチーフにオリジナルの俳句を創作し、随筆風に自らの思いを表現するのであるが、冒頭に、私が抽出して紹介させていただいた先ほどの「舟入川」をテーマに創作された作品以外にも、鹿見神社を取り上げ「鹿見山の 結ぶ枝木の 芽ほころぶ」等、卒業を間近に、ふるさと大津地域への思いが、それぞれの生徒の視点で故郷への暖かいメッセージとして語られている。

大津中学校の勤務が初めてとなった令和4年度の着任式で、新しく本校へ赴任した教員を代表して挨拶をさせていただいた。その後に沸き起こった体育館一杯に響く歓迎の拍手の嵐。私は、今まで何校か（人事交流でお世話になった岐阜県の中学校も含め）勤務させていただいたが、この暖かい思いやりのある行為に出会ったことがなく、大変感激した。

続いて行われた始業式の挨拶で私は、「この春の人事異動で、大津中学校で勤務を始める先生方は、だれしも、期待と不安を持って今

日この日を迎えていると想像するが、皆さんの拍手によって抱いていた不安や心配は全てなくなったと感じています。温かい気持ちを贈ってくれて、本当にありがとう！」と式辞の前に感謝の言葉を寄せることができた。

大津中学校で育つ生徒の良さは、こうしたエピソード以外にも多くある。

本校には、体育系文化系の部活動が多くあり、どの部活動も熱心に取り組んでいるが、陸上部の活躍は県内に響いている。本年度は、中学1年生の女子選手が200mで、中学3年生の選手を抑え、見事優勝し新聞やテレビにも大きく取り上げられた。

そればかりではない。大津地域で地道に精力的に活動されている「くろしおトランポリンクラブ」に所属する中学3年生の女子生徒が中四国の大会で優勝し、第77回国民体育大会（とちぎ国体）への出場が決まっている。

硬式テニスでは中学3年生男子が四国大会で優勝するなど、どの生徒も日々の練習の成果を発揮し、大津中学校への嬉しいニュースとなるばかりでなく、地域を勇気づける話題を提供してくれている。

大津中学校は、経営理念に社会人基礎力をはぐくむことを持ち、校訓・教育目標には「自主・協力・創造」夢・志をはぐくむ学校を掲げ、本年度は読み解く力とあらかず力の育成を重点に研究を進めている。

授業研究などの研修に関わって、講師の先生方にご来校いただいているが、どの講師の先生方も本校の授業の通覧から、生徒の落ち着いた授業態度や授業内容をほめていただいている。こうした環境にあるのは校区の大津小学校の先生方のご努力と本校教員の積み上げ、小中連携の取組の賜物であると感じている。

さて、地域に支えていただき育まれる大津中学校の生徒であるが、経営理念にある「社会人基礎力」をより意識し、地域や地域人材と大いに関わりながら、キャリア教育の視点で取り組む学校教育を今後積極的に進めていきたいと

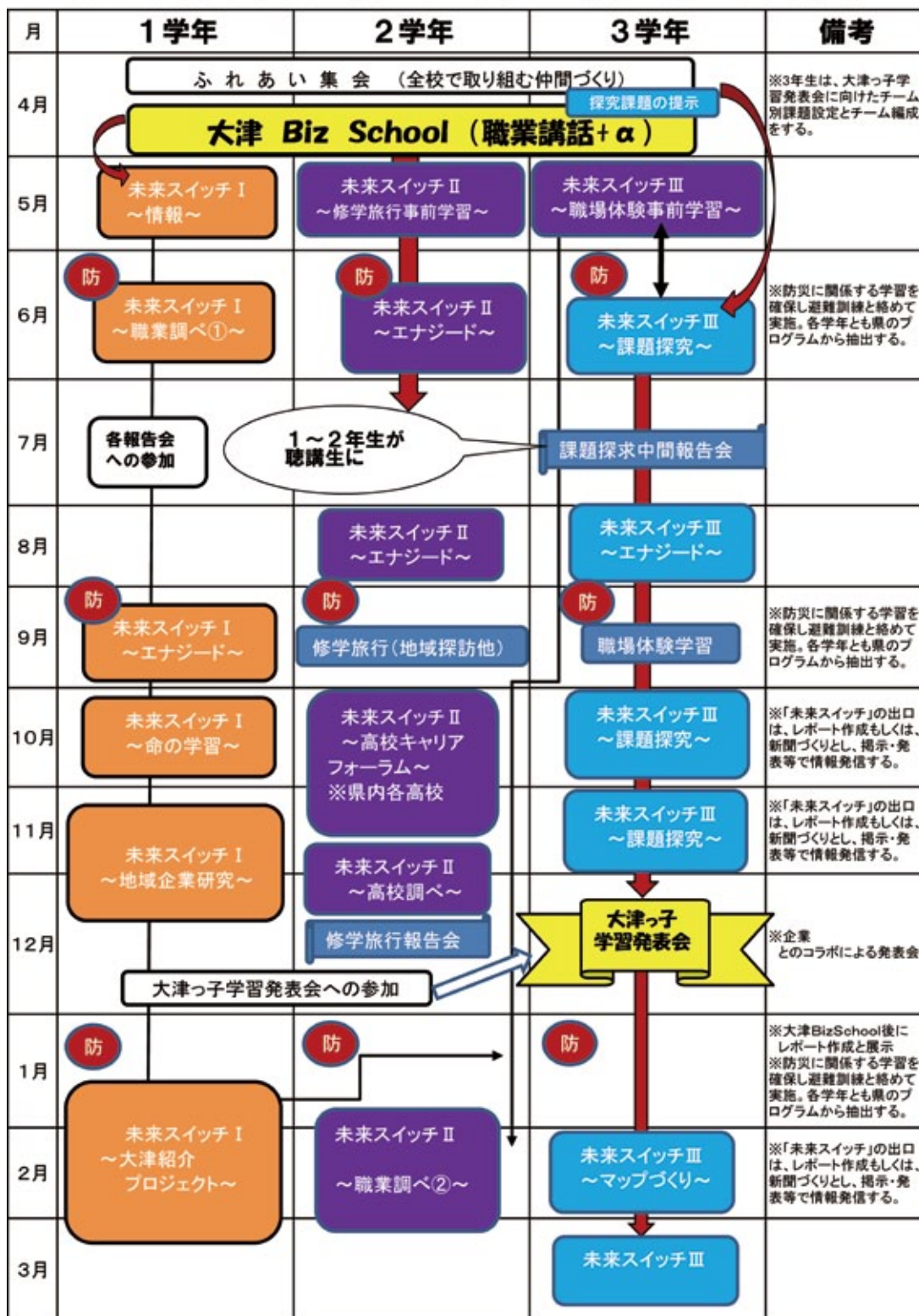
考えている。

ゴールのイメージをいいかえると、土佐弁でいう「分たちのおせ(※)」ということである。大津中学校での学びが卒業後社会に出た時に生きて働くものにならないといけないし、「大津中学校の教育校門を出でず」となることになってはならない。

本校での学びが活かされ、ソサイエティ5.0の時代を生き抜き、先導的な役割を担い活躍する本校出身の生徒を育成していきたい。

※分たち=才気煥発(かんぱつ:かがやき現われること)のしっかり者
おせ=大人

今後の大津中学校の総合的な学習の時間の流れ(系統図)



安全・安心のまち

国分川・舟入川河川激甚 災害対策特別緊急事業について

高知県土木部河川課

平成10年9月24日から25日にかけて、秋雨前線の活動に伴う豪雨により、県中央部で各河川が氾濫し大きな被害が発生しました。

なかでも高知市東部の国分川・舟入川の流域においては、多くの建物で床上・床下浸水が発生、また交通網・通信網の遮断など多大な被害が発生しました。

この災害を受け、国分川・舟入川河川激甚災害対策特別緊急事業により、国分川で11,980m、舟入川で4,800mの区間、総延長16,780mで堤防の拡幅や築堤、河床の掘削、橋梁の架け替えや堰の改築を行ないました。

この区間の用地買収に伴う地権者の方々のご協力、また工事中にご協力を頂いた地区の皆様などの多大なご支援ご協力があり、平成17年3月に完成しました。この事業が完成したことにより、河川が流せる水の量が増加したことから、氾濫する可能性が少なくなるなど、大きな治水効果があります。

しかし、大津地区をはじめ高知市内は、低い土地が多く、内水による浸水も含め、浸水被害が発生しやすい地形となっております。また、近年は集中的な降雨など、気候の変動などに伴い、降雨の激甚化なども見受けられます。

工事前に比べ治水の安全度は向上していますが、ハザードマップなどにより、お住まいの箇所の危険性を把握していただくとともに、大雨が予想される時は早め早めの避難をお願いします。



'98豪雨による浸水状況



激甚災害対策特別緊急事業完成時

'98 高知豪雨後の下水道事業による内水排除対策

高知市上下水道局下水道整備課

<はじめに>

大津地区をはじめ、高知県中部に甚大な浸水被害をもたらした'98高知豪雨を契機に、河川管理者である高知県は、平成10（1998）年度から平成16（2004）年度までの6年間で「河川激甚災害対策特別緊急事業」により、国分川・舟入川の河川改修を行いました。

一方、高知市は内水排除対策として、鹿兒、関、大津の3つの排水分区において、下水道事業により雨水ポンプ場や雨水幹線水路などを整備し、平成21（2009）年度には、目標としていた1時間あたり降雨強度77mmに対応できる排水施設の整備が完了しました。

しかしながら、近年は、気候変動の影響などから、排水施設の能力を超える豪雨による浸水被害が全国的に頻発しています。

そのため、河川や下水道の関係者のみならず、河川流域の関係者全員が協働して浸水被害の軽減に取り組む流域治水の取組が進められており、令和3（2021）年度に、高知県は舟入川を含む国分川水系を対象とした流域治水プロジェクトを策定しています。

このうち、下水道施設については、これまでに整備した排水施設の老朽化対策など、施設機能を保全するため、適切な維持管理に努めるとともに、河川氾濫が発生した場合でも、浸水被害によるポンプ場の機能停止を防ぐため、下水道施設の耐水化を進めています。

<事業概要>

・鹿兒排水分区

鹿兒、舟戸地区の雨水排水能力は、県が整

備した鹿兒川排水機場、鹿兒第二排水機場の2機場により240 m^3 /分でしたが、'98高知豪雨の被害を受け、平成17（2005）年度に県市の合併事業により、鹿兒第二排水機場に新たにポンプ設備2台を設置したことで、排水能力が444 m^3 /分に向上しました。また、平成12（2000）年度から平成16（2004）年度にかけ、鹿兒第二排水機場から県教育センター南東までの約1kmの区間に、雨水幹線函渠を整備しました。

・関排水分区

'98高知豪雨の被害を受け、平成15（2003）年度には排水能力105 m^3 /分の暫定ポンプ場を供用開始していましたが、平成18（2006）年度から雨水ポンプ場の工事に着手し、平成21（2009）年度末には、排水能力401 m^3 /分の関雨水ポンプ場の供用を開始しました。また、既存水路の排水能力を増強するため、平成17（2005）年度から平成20（2008）年度にかけて、延長約440mの水路を整備しました。

・大津排水分区

舟入川北岸地区の雨水排水能力は、市耕地課が整備した田辺島排水機場により252 m^3 /分でしたが、'98高知豪雨の被害を受け、平成14（2002）年度から大津雨水ポンプ場の整備に着手し、平成17（2005）年度には排水能力252 m^3 /分のポンプ場として暫定的に供用を開始し、平成18（2006）年度には排水能力444 m^3 /分のポンプを1台増設したことにより、2機場合計の排水能力は、696 m^3 /分に向上しました。また、平成15（2003）年度から平成19（2007）年度にかけて、延長約450mの水路を整備しました。

令和4（2022）年度からは、田辺島排水機場の老朽化したポンプ1台を廃止し、新たに

大津ポンプ場へポンプ1台を設置する工事に着手しており、工事完成予定の令和5（2023）年度末には、2機場合計の排水能力は714m³/分となります。

<下水道施設の南海トラフ地震対策>

大津地区の下水（汚水）は、高知市・南国市・香美市の3市から下水が流入する県管理の高須浄化センターで処理されています。その高須浄化センターには、南海トラフ地震において震度6強の大きな揺れと約2mの津波が押し寄せると想定されるため、平成23（2011）年度から高知県が施設の耐震・耐津波対策工事に着手しています。

この対策工事は、南海トラフ地震発生後においても最低限の処理機能を確保するため、重

要施設の対策を優先して進めており、令和3（2021）年度までに汚泥処理棟・ポンプ棟・水処理棟、管理棟の一部において、対策が完了しました。令和4（2022）年度からは、水処理施設の耐震工事に着手しており、今後も対策を進めていきます。

また、管渠を管理する高知市におきましては、南海トラフ地震時の長期浸水や液状化等による被害に備え、応急復旧活動に必要なポンプや自家発電設備等の資機材整備や、円滑かつ迅速な応急復旧活動ができるよう、各種団体からの支援を想定した災害協定の締結を進めるなど、応急復旧体制の強化を進めています。

大津/高知市 合併50周年記念誌寄稿

高知東警察署 署長 肥本 裕二

1 高知東警察署の概要

大津地区の皆様には、日頃から高知東警察署の業務運営に関し、ご支援、ご協力を賜っておりますことに心から厚くお礼を申し上げます。

さて、当署は、高知県警察が平成28年を目前に、16署体制から1署増5署減で12署体制とする警察署再編計画に基づき、平成26年4月、高知警察署、高知南警察署及び南国警察署の管轄区域を見直し、また、これまで県中央部の山間地域を管轄してきた本山警察署を統合して、高知市の東部に新たな警察署として発足しました。

同年3月20日には、高知県知事をはじめ、地元大津地区からもたくさんの皆様にご臨席

を賜りまして、盛大に落成式が行われ、初代の三谷仁志署長以下の体制により、4月1日から業務を開始し、今年で9年目を迎えたところです。

その間、署長には、初代の三谷氏に続き、北岡弘氏、岸田浩氏、朝倉栄一郎氏がそれぞれ歴任された後、5代目の高橋努署長から私が「住民の安全安心の確保」という重みのある「治安維持のバトン」の引継ぎを受け、令和4年3月25日付けで第6代高知東警察署長として着任いたしました。

当署は、高知市やその周辺において事件や事故が集中発生するという本県の治安情勢を踏まえ、この地域における警察力を強化し、将来にわたり、より高い水準の治安を住民の皆様提供するために設置された警察署です。

また、近く発生が予想されている南海トラフ大地震発生時における災害活動の拠点とし

ての役割など、当署には大きな期待が寄せられています。

主なものを紹介しますと、鉄筋コンクリート造4階建の本館は基礎免震構造で、敷地内には約2万ℓの燃料タンクを備え、自家発電設備により約1週間の稼働が可能です。

また、県下で初めて敷地内に手押しポンプ式の井戸2基を設置しているほか、津波対策として、かさ上げされた駐車場や臨時のヘリポートも備えております。

管内は、雄大な太平洋を望む県都高知市の東部及び北部である大津、介良、高須、五台山、三里、一宮及び土佐山の7地区と徳島及び愛媛の両県との県境に接する山間地域の旧本山警察署管内であり、現在は本山警察庁舎の活動区域である長岡郡本山町、大豊町、土佐郡土佐町及び大川村の3町1村も管轄しています。

管轄総面積は約867.75km²で、県下の警察署の中で2番目に広く、人口は約86,000人で、本署の活動区域では、本署の他に一宮、高須及び三里の3交番、大津及び介良の2駐在所、また、本山警察庁舎の活動区域では、庁舎の他に豊永、杉、田井、森、地蔵寺及び小松の6駐在所をそれぞれ置き、私以下署員132人体制で治安の維持に当たっています。

なお、署員数は、署発足当時に比べると若干減少をしましたが、限られた人員をより効率的に配置・運用することにより警察力を強化し、将来にわたり、より高い水準の治安を住民の皆様に提供するとともに、南海トラフ大地震などの災害拠点として、安全で安心な地域社会の実現に努めてまいります。

2 大津駐在所の歩み

(1) 沿革

大津駐在所は、昭和12年10月15日、当時の長岡郡大津村長崎地区の高村梧樓様ほか数名の有志の方々から寄贈された当時の長岡郡大津村乙668番地口に建築されました。

当初は、大篠警察署大津村巡査駐在所として発足し、長岡郡大津村及び土佐郡高須村を受持区域としていましたが、昭和17年6月1日、市町村合併により高知市に編入された高須村は受持区域から除外されました。

昭和23年1月31日、警察制度改革に伴い、国家地方警察香長地区警察署大津村巡査駐在所となり、昭和27年1月31日、後免地区警察署大津村巡査駐在所と改称されました。

昭和29年7月1日、現行警察法に改正されたことに伴い、後免警察署大津村巡査駐在所と改称されました。

その後、昭和35年10月1日、南国警察署大津村巡査駐在所に、昭和41年5月1日、南国警察署大津駐在所にそれぞれ改称されました。

昭和43年5月10日、施設の老朽化に伴い、現在の「とさでん交通鹿児島電停」付近の長岡郡大津村切抜乙499番地7に新築移転しました。

昭和57年4月1日、都市化に伴い2人制の複数駐在所に昇格しました。

平成3年3月10日、施設の老朽化に伴い、現在の高知市大津乙923番地27に新築移転しました。

平成13年4月1日、都市化に伴い3人制の複数駐在所に昇格しました。

平成26年4月1日、警察署再編統合計画により、高知東警察署大津駐在所に改称され、

現在に至っております。

(2) 受持区内の概要

大津駐在所の受持区は、高知市大津全域で、高知市東部の舟入川の兩岸であり、東端部には南国市との境界があります。

舟入川の左岸には、国道195号及びとさでん交通後免線が東西に延び、舟入川右岸と国分川の左岸に挟まれた地域には、県道374号高知南国線（大津バイパス）及びJR四国の土讃本線がほぼ東西に延びています。

公共交通機関については、JR四国では、「土佐大津」駅が所在し、とさでん交通後免線では、「長崎」をはじめ9電停が所在します。また、受持区内には、旧来の住宅地や田園地帯が広がり、大津バイパスの北側には食品団地や鉄工団地等の工場群があります。

令和4年4月1日現在における大津駐在所受持区域内の面積は4.83km²であり、5,014世帯、10,318人の方々が居住しています。

大津駐在所では、警部補の駐在所長以下3人の警察官を配置し、受持区域内の治安維持に従事しています。

3 これまでの取り組み

平成26年には、新しい警察署のスタートに当たり、署のスローガンを「県民（地域住民）から親しまれる明るい警察署」と決めました。

これは、大津地区をはじめ、管内の地域の皆様とのふれあいを大切に良好な関係を構築し、皆様から親しまれ、皆様のご理解とご協力をいただきながら警察活動を推進すること、また、警察署の建物の内外共に白色の明るい造りとなっており、そこで勤務する署員も明るく笑顔のある職場づくりに努め、警察の暗いイメージを払拭するといった考えによ

るものです。

そして、当署が新設署として発足するに当たり、2つの大きな課題を抱えておりました。その一つは、旧本山警察署管内の方々から出た「警察署の統合により、治安が低下するのではないか」といった統合による治安維持に対する不安を払拭させることです。

もう一つは、当署の設置目的でもある「高知市及びその周辺部における警察力を強化し、県内全体の治安水準を向上させる」ということです。

一つ目の課題ですが、旧本山警察署は、当署の分庁舎である本山警察庁舎として運用しており、地域住民の利便性に配慮して、道路使用、銃砲所持等の許認可業務や運転免許の更新手続などの業務を継続して行っているほか、自動車警ら班を設置してパトロールの強化や地域に密着した駐在所の活動などを継続し、「よくパトロールしてくれる」等といった声も寄せられております。

一方、もう一つの「警察力を強化し、治安水準を向上させる」という課題については、関係機関・団体との連携や地域住民との良好な関係の構築を第一に考えたきめ細かい業務管理への配慮と署員間の連帯意識の構築にも目配りをした上で業務を進め、各課が連携して業務分担を見直し、地に足がついた仕事ができる環境を整えました。

早いもので、発足から9年目を迎えました。が、今、申し上げた先代の5人の署長をはじめとする歴代署員が一丸となり、当署のスローガンである「県民（地域住民）から親しまれる明るい警察署」を推進した結果、大津少年剣道クラブをはじめ、大勢の子ども達が当署道場で剣道や柔道の稽古に汗を流してい

るほか、南海トラフ大地震等の災害発生に備えて、大津地区の自主防災組織の皆様や大津中学校の生徒、さらには近隣の企業の皆様などが避難訓練等で当署を活用していただくなど、地元の皆様ともふれあいが生まれ、親しまれるようになりました。

4 今後の取り組み

(1) 地域住民に期待される警察署

先に申し上げたとおり、平成26年の警察署統合による高知東警察署の発足については、少なからず反対のご意見もありましたが、地元での説明会の開催等により理解を得て再編に至りました。

再編から9年目を迎えた現在も再編の真価が問われていることを踏まえて、「治安の悪化を招かないこと」、「行政サービスを低下させないこと」の二つを合言葉に署員一丸となって住民の皆様のお安全と安心を守るため、各種業務に取り組んでおり、また、署長として心がけていることは、地域住民の意見や要望に対して真摯に対応することだと考えております。

本年6月に開催された警察署協議会におきましては、「高齢者の交通事故防止を徹底していただきたい」、「南海トラフ地震等の大規模災害発生時における避難行動や平素からの防災対策」等について貴重なご意見、ご要望をいただきました。

これらのご意見に対しては、警察としての取り組みを説明するとともに今後、検討や取り組みが必要な事項については、改めて説明をさせていただきました。

このように寄せられたご意見やご要望に対する警察としての対応をフィードバックすることが、地域住民の皆様のお信頼を確保するこ

とに繋がると思っております。

(2) 犯罪の抑止と検挙の徹底

県下において、本年も被害額が1,000万円を超える被害となっている特殊詐欺事件への対応は重要な課題であり、犯罪の抑止と検挙の両面を踏まえたタイムリーな施策を推進しております。

その他、近年、全国的にクローズアップされているDV、ストーカー、児童虐待等の人身安全関連事案についても、迅速かつ安全な対応の徹底を図っております。

(3) 高齢者を重点とする交通事故防止対策の推進

当署管内の令和3年中の高齢者による交通人身事故は58件で、全事故の約4割を占め、5人の高齢者が犠牲になっています。

重大事故に直結する悪質性、危険性、迷惑性の高い違反に重点を指向した取締り、各種講習や高齢者宅訪問等の広報啓発活動に合わせて、交通上危険な高齢者の発見に努めるとともに、運転免許自主返納の働きかけを行っています。

(4) 南海トラフ巨大地震から住民を守る

当署管内では、南海トラフ巨大地震が発生した場合、低地が多い管内南東部の大津、高須、介良、五台山及び三里の各地区に津波が到達し、浸水、火災等により多数の死傷者が出る大規模災害となる可能性が高いといわれています。

また、テレビなどで報道されました平成23年に発生した東日本大震災の被災地の光景は忘れることができません。

巨大地震が発生した場合、署長として、地域住民の皆様と署員の安全確保を最優先に活動することになりますが、マニュアルどおり

に活動できるものとは限らず、難しい判断を迫られるものと思います。また、発災直後の混乱の中では、被災された方々の間では、「やり場のない悲しみや怒り」が込み上げてくるものと思います。

ですから、発災時における署長の任務は、「地域住民の安全を確保すること」、「署員を殉職させないこと」、「被災者のやり場のない悲しみや怒りを受け止めた的確な被害者支援をすること」の3点だと考え、日頃から「今、地震が発生すれば、どのように動くべきか」をイメージし、自問自答しながら、治安維持の任務に就いています。

5 結びに

この春、署長に着任した際に警察署のホームページでごあいさつしたとおり、今後におきましても、高知県警察の運営指針である「高知県の安全・安心を守る強く優しい警察」を基本に「正しく、仲良く、親切に」を新たな署のスローガンとして、大津地区をはじめ、地域の皆様とのふれあいを大切に「地域住民の皆様から親しまれる明るい警察署」づくりに努めるとともに、当署の活動が県内全体の治安水準の向上に寄与することができるよう、署員が一丸となって業務に邁進していきたいと考えておりますので、より一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

～防火・防災をめざして～

高知市消防団大津分団 分団長 笹岡 充

「大津村消防組」から「大津村消防団」を経て、1972年、高知市への合併に伴い「高知市消防団大津分団」として活動を始め、年末の特別警戒や1月の消防出初式、高知市総合水防訓練、分団員の消防学校での研修、機関員講習への参加など、分団員の能力の向上を図りながら、高知市の常備消防と連携して消防活動を行っています。

また、1998年の高知豪雨災害以後は、高知市から供給された緊急消防自動二輪車（赤バイ）や救助用ゴムボートなどの走行訓練や操船訓練の実施、ハムクラブ（アマチュア無線）の結成と月1回の交信訓練も行っています。

大津地区町内会連合会や大津分団後援会の物心両面でのご支援に感謝申し上げます。

支援金は、団員の県内外の視察研修旅費や消防操法大会の練習に対する費用弁償に活用させていただき、他、訓練用消火器、消火訓練標的、AEDトレーナーセットなどの資材を購入し、各町内会・防災会との合同防災訓練、小学校での防災参観日、中学校への救命講習インストラクター派遣事業に活用させていただいております。

今後も、市民の生命と財産を守るため、分団員の能力向上に向けた取り組みを継続していくとともに、現在、分団員の定員24名のところ実員19名となっているので、消防団活動をより効果的にアピールし、消防団員の確保を図りながら、災害時の備えを推進してまいります。



大津分団屯所



大津分団田辺島部



大津分団長崎部



大津分団ポンプ自動車



大津分団田辺島部ポンプ積載車



東消防署との合同訓練



国分川でのボート操船訓練

高知城東病院の歩み

医療法人厚愛会高知城東病院

医療法人厚愛会高知城東病院は、大津村と高知市の合併より前の昭和44年8月、鹿兒電停前に「鹿兒病院」として開院した。その後、昭和55年に現在の「高知城東病院」と名称を変更し、地域のみなさまの健康と自立のお手伝いをするため、病床数を段階的に増床していき現在は243床を有している。

時代の変化に伴い病院形態の切り替えを行い、平成4年に一般病床から特例許可老人病床へ、平成10年に特例許可老人病床から療養型病床群へと切り替え、平成12年に医療療養型病床群を介護療養型医療施設へと形態を変更した。

また平成31年4月には介護療養型医療施設から介護医療院「高知城東病院介護医療院」へと151床を変更した。また患者様への一貫的なサポートをするために在宅系サービスとして平成18年に通所リハビリテーション「オーロラ」、それを皮切りに平成21年にデイサービス「リーズ」、平成24年に居宅介護支援事業所「クララ」を開設した。

当院では4つの基本方針がある。

1. 患者様の人権、人間性を尊重し、きめ細やかなサービスを提供します。
2. よりよい療養環境にこころがけ、入院患者様が快適な療養生活を送れるよう努力します。
3. 常に向上心を持ち、医療・看護・介護の質を高める努力を続けていきます。
4. 他の医療機関との連携を密にし、安全で効率的な医療を実践します。

この基本方針を元に当院では、クオリティ・オブ・ライフ(その人にとっての「人間らしい生活」「自分らしい生活」を送れるようにすることを目指した医療・介護の考え方)に取り組んでいる。

また共同で過ごす部屋においてもプライバシー

を守る構造になっており、入所患者様にとっての生活の質や人生の質を一番に考えて、全職員が全力でサポートしている。これからも基本方針のもと、地域の皆様に必要とされる存在であり続ける努力を行っていき、医療・介護での総合サポートができる病院として地域に貢献していきたい。

今後の医療・介護方針として感じるのは、在宅介護が重視されている点である。患者様本人としては、自宅で過ごすということは自分らしく生きるという意味で素晴らしいことであり、できる限りのサポートをすることは必要であるが、一方で介護を続けている家族にとっては負担が大きく、高齢化社会が進むなか老々介護等の介護の負担が問題となっている。そういった問題に対して地域の相談窓口としての役割も果たしていきたい。

また、令和4年6月1日に当院院長である大澤梨佐が皮膚科外来を開設した。今年3月までは高知大学医学部附属病院や高知県立幡多けんみん病院で皮膚科医として診療をしており、湿疹や水虫など身近な皮膚疾患だけではなく、皮膚腫瘍の摘出なども行っている。大津地区には皮膚科が少ないとのことなので少しでも地域の皆様のお役に立ち、これからも大津地区の皆さんとともに歩んでいきたいと心から思う。

新型コロナウイルスの第7波の真っ只中で、感染者が毎日最大数を更新している状態の中で、入院・入所患者様の安全を第一に考え面会制限を実施している。オンラインでの面会は可能な限り対応してはいるが、直接での面会ができないことに申し訳なさを感じている。

医療機関・介護施設としてwithコロナという訳にはいかず、ゼロコロナを目指して全職員気を引き締めて日常生活を送っている。本当に一日でも早くこのコロナ禍が終息することを心から願ってやまない。

コミュニティ活動

コミュニティ計画推進市民会議 から連携協議会へ

大津まちづくり連携協議会
会長 濱田 敏裕

大津まちづくり連携協議会について記述するためには、その前身である大津地区コミュニティ計画策定市民会議、同計画推進市民会議（以下「策定市民会議」、「推進市民会議」）について触れなくてはならない。

策定市民会議は、平成8年8月、当時の高知市の「行政と住民が一体となって、地区の課題、問題点を解決する」という施策の下に発足した。初代会長には、澤田性一氏が就任され、約1年の期間をかけて大津地区全域の課題を拾い上げ、「大津地区コミュニティ計画(案)」を平成9年9月、当時市長であった松尾徹人氏に提案した。当時の役員は次のとおりである。

(代表) 澤田 性一

(副代表) 坂本 小之、耕崎 稔、徳弘 隆男

(世話人) 東山 真人、上田 隆、下元 正清、

濱 明義、福富 宣子、竹村 幸男、

田所 豊稻、都築あつ子、東山 正

(敬称略)

「大津地区コミュニティ計画(案)」について、行政とのすり合わせが終了し、策定市民会議から推進市民会議に移行し、計画実施という矢先に、皆様もご存知の'98豪雨が発生し、大津地区は未曾有の浸水被害を受ける。その後の被害対応に約1年間活動は中止せざるを得なかった。私は、当時大津小学校PTA会長をしており、'98豪雨後の推進市民会議に合流した

経緯がある。

平成11年秋より、策定市民会議で作られた「水と緑・歴史と文化の里大津」というキャッチフレーズの下、「歴史と自然を誇るまち」「安心してくらせるまち」「おもいやり、ふれあいのあるまち」を目指して活動が始まった。推進市民会議の初代代表者は澤田性一氏であり、橋田稔氏、耕崎稔氏、そして私と引き継がれてきた。

推進市民会議の事業として幾多の案件に取り組んできたが、主なるものとして児童公園南の親水公園整備、鹿児駐輪場の整備、大津地区の史跡案内板の整備等が挙げられる。親水公園に関しては、どのような形で作れば良いのかを探るために、県内の数か所の関係施設を見学に行き、水質を維持するためにはどうしたら良いのか等を何度も話し合いをして、平成15年8月24日に完成した。

しかしながら親水公園に関してだけは、完成して20年経った今検証した場合、失敗とまではいえないものの他の手を選択した方が正しかったと思っている。水が存在する公園の管理は、本当に大変だということを、現在管理責任者となっている私は痛感している。

推進市民会議はその後も、3回のまち歩きを実施したりして、課題点を探ってきたが、策定市民会議で拾い上げた短期に処理する課題点はほぼ終了し、中長期の課題だけが残ることになっていった。それに従い、月1回開催していた例会も、2月に1回にペースダウンしたが、それでも例会には必ず10名以上の参加者があり、時々課題が検討されてきた。

そのような中、平成30年頃より、高知市のコ

コミュニティ活動の施策が変わり、地域のコミュニティ活動も推進市民会議から地域連携協議会への移行が始まった。つまりは、全ての地区市民全員を対象とする活動の場から、大津地区にあるボランティア組織の集合体である連携協議会でこれからの大津のまちづくりを協議するようなシステムに変わっていった。

このシステムの変化には当然のことながら、メリット、デメリットが存在する。この場では、その一つ一つに触れることはしないが、地域に住む一人一人のニーズを把握することはより困難になるのは間違いない。それをいかに解決するかと同時に地域連携協議会というシステムを利用しながら、大津全体の地域力の向上を目指していかなければならない。

大津地区には、今大きな課題が幾つか存在

する。地域住民だけではどうしても解決できない問題もある。これらのことは、当然高知市、もしかしたら高知県、国にまで上げていかねばならないこともある。ただ、大津地区の地域力を高めるといって考えたら、住民間の問題共有とそれに対する個々の意識を高めることにつきると考えている。

その地域連携協議会自体の総会も、ここ3年にわたる新型コロナ感染症感染拡大防止のために開催できずに終わってしまっている。新型コロナウイルスがこの世界から完全になくなるのは望みようがない状況にあるが、せめて通常の風邪レベルとして捉えられる日が来るのを心待ちにしている。その日が来ることを信じて、今年度は、小学校、中学校を巻き込んで、来年度からの大津で行われる色々な事業の見直しを図りたい。

大津まちづくり連携協議会参加団体

大津地区町内会連合会	高知市消防団大津分団	高知市消防団大津分団 後援会
大津校区交通安全会議	高知県交通安全協会 高知東支部大津分会	高知市大津ふれあい センター運営委員会
大津校区青少年育成協議会	大津地区社会福祉協議会	大津地区民生委員児童 委員協議会
日赤大津分区	日赤大津分区奉仕団	舟入川を美しくする会
大津駐在所連絡協議会	大津文化祭実行委員会	大津地区暴力追放推進 協議会
大津花いっぱい会	大津体育会	大津地区地域防災会
大津小学校 PTA	大津中学校 PTA	大津民具館保存会
大津地区公民館連合会	大津地区老人クラブ連合会	大津こども見守り協議会
大津地区補導委員会	(一財)大津教育振興会	大津地区タウンポリス
大津地区人権啓発推進 委員会	おおつ祭り実行委員会	大津小学校
大津中学校	JA 高知市大津支所	宅老所たんぽぽ大津

いきいき百歳体操 大津地区連合会

会長 濱田 りえ

私達の介護予防のための『いきいき百歳体操』は平成14（2002）年に高知市が「宅老所たんぽぽ大津」で開始して、はや20年となりました。『いきいき百歳体操大津地区連合会』も平成24（2012）年から10年となっています。

現在は9か所の公民館などで、令和2（2020）年からの新型コロナウイルスにも負けず、週1~2回いきいき百歳体操を開催しています。

会場は、長崎、関（昼・夜）、北浦、舟戸、ふれあいセンター、もみじ野、田辺島、県住となっています。

年に1回『いきいき百歳体操大交流大会』がオレンジホールで盛大に行なわれています。

これからも介護予防のために、自分の人生を自分で歩いて、日常生活が最後までできるように、この『いきいき百歳体操』を30年いや50年以上続けていく予定です。

目標としては、『なるこ踊り』に続くことです。



関公民館にて

おおつ祭り実行委員会

副委員長 横山 貴博

おおつ祭りは、「誰もが気軽に参加できるお祭りをやりたいね。」という一住民の声かけから、「おおつ音頭」が制作されたことをきっかけに、地区の有志により平成24年からこれまで8回開催してきました。

祭りは、毎年8月最後の日曜日16時から20時に、大津中学校のグラウンドで開催しています。大津地区ゆかりの店舗や団体の方に出店をお願い

いし、おいしい食べ物や飲み物を提供していただいています。また、お祭りには欠かせない踊りや演芸についても大津を拠点に活動されている各団体の方をお願いしています。

しかしながら、まだ歴史が浅く、地区の有志が運営しているため、さまざまな課題がありますが、毎年開催後に実行委員による意見交換を行い、次の開催に向けて運営方法やイベント内容等の改善を図っています。

おおつ祭りは小規模なお祭りではありますが、徐々に地域の住民の方に浸透してきており、



年に一度、子供からお年寄りまで一堂に集まって交流することができる場としてこれからも続けて行きたいと考えています。

コロナ禍となった2020年から開催できていない状況ですが、今後は開催方法も含めて検討を行い、再開したいと思います。

おおし音頭

作詞・作曲 田所 可南子

今日もどこからか にぎやかな声
 どっちをむいても 聞こえるよ
 どうも おじちゃん どうも おばちゃん
 いつも元気を ありがとうさん

高天原に 舟入川に
 大津のいとこ 見せましょか
 いつでも どうぞ お待ちしてます
 ゆかいな 仲間が おでむかえ

ぼくの わたしの ふるさと大津
 生まれてよかった ありがとう
 明るくのびのび にこにこ笑顔
 みんな大好き お・お・つ

山あり谷あり あるけれど
 紀貫之が 船出した
 きらきら 光る この川を ながめてみようよ

ほら 大津の仲間が 呼んでいる
 いつでも どこでも 仲間が 呼んでいる

大津校区交通安全会議

会長 澤田 昭子

「交通安全は、家庭・地域・学校・職場から」をスローガンとして、市民一人ひとりに交通安全意識の普及と高揚を図るとともに、正しい交通ルールとマナーの実践を習慣づけ、交通功労者及び運転者等の表彰等、会員サービスを積極的に推進することを念頭に、大津校区交通安全会議、指導員、母の会のメンバーが活動している団体です。

指導員は昭和46年、母の会は昭和52年に設立しました。大津校区交通安全会議は昭和53年に指導員、母の会の会員達と連携を密にするために一つの団体として設立され現在に至っています。

活動内容としましては、春の全国交通安全運動、秋の全国交通安全運動、年末年始の交通安全運動、毎月20日は通学路での街頭指導、12月には、はりまや橋を中心に指導員による早朝街頭指導に参加しています。

また、大津単独では、通学路のカーブミラー

清掃、清和中・高生徒の舟入川周辺のマラソン大会の時の交通安全のための指導、大津中学校生徒がイベントのために美術館に移動時の街頭指導を行っています。

年3回の交通安全運動時、大津一円の掲示板へポスターを町内会へお願いして交通安全の啓発に取り組んでいます。

大津中学卒業生、芸術学園、大津東保育園、大津保育園の卒園児みんなに交通事故にあわないよう願って、記念品を贈呈しています。

これからも子どもと高齢者の事故防止、飲酒運転の根絶、すべての座席のシートベルト、チャイルドシートの着用などをスローガンのもと、一人ひとりが交通ルールを守り、事故にあわない、また事故をおこさないまちづくりに日々街頭指導を行っていきます。



大津地区公民館連合会 ～50年の歩み～

会長 今村 隆一
会計（元会長）藤岡 省次

高知市と合併する前から各地域にあった公民館は、それぞれが独自に活動していました。このため、大津地区の公民館が統一した活動を行うことを目的に昭和55年、大津地区公民館連合会（以下「連合会」）を設立し、初代会長に坂本小之氏が就任しました。当時、規約は作っていたようですが'98豪雨の浸水で分からなくなりました。

平成19年4月、3代目会長急逝後、空位だった会長に4代目として藤岡が就任後、新しい規約（平成19年7月4日施行）を作成し、連合会を情報交換の場とすること、連合会が中心になりブロック研修会を開催すること、会費などを決定し、ふれあいセンター（特別会員）と10公民館（長崎・関・北浦・舟戸・鹿児・鹿児東・茶山・大津中央・田辺島・もみじ野）で再スタートしました。

ここで歴代会長を紹介しておきます。初代：坂本小之氏（昭和55年度～平成11年度）、2代目：下元正清氏（平成12年度～14年度）、3代目：澤本稔雄氏（平成15年度～18年度）、4代目：藤岡省次

（平成19年度～26年度）、5代目：前田裕範氏（平成27年度～令和3年度）、6代目：今村隆一（令和4年度～）と続いています。（高知市担当課調べ）

連合会では、共同募金会大津地区委員会の地域団体活動育成助成金を活用して、ブロック研修会の開催、リーダー研修会や郷土演芸大会、ボーリング大会等に一部助成と出演依頼、文芸おおつを全館に配布、大津食品工業団地と学校通学路周辺の一斉清掃に軍手を支給、保育園や小学校でのバルーン作りなど、多方面で活動してきました。

令和2年度よりコロナ禍で行事の中止が相次ぐ中、コロナ禍対策として各館に非接触型温度計の支給やコロナ対策費用を助成するなど地区の公民館活動を支援してきました。コロナ禍が落ち着いた後、各館が助け合い助言し合いながら、活発な公民館活動が再開できることを願っています。



郷土演芸大会でのおおつ音頭

大津体育会 ～今までとこれから～

前会長 西川 慶

今では大津体育会の発足当時のことを知る人も少なくなり、聴き取りできるすべもありません。ただ、昭和56年に発行された大津小学校創立百周年記念誌「私たちの大津」に、故坂本小之さんが『大津体育会の歩み』として書かれていて、当時の大津は相撲が盛んで、県下青年相撲大会や小学校対抗相撲大会などで好成績を残したそうです。

そして昭和40年7月1日に福永実教育長を会

長として発足をみたと記されています。

その後『村ぐるみ体育大会』が大津小校庭で開催され、後に区民体育大会そして区民運動会へと変化していったようです。

現在の体育会には、男女バレーボール、ソフトバレーボール、ソフトボール、バドミントン、卓球、ラージボール卓球、グラウンドゴルフ、大津走ろう会の9つの専門部を置いているが各クラブともに部員数が減少し、大津地区民のみでの大会出場はもとより、週1、2回の練習もままならない日もあるようです。

これまで各クラブの要望により、高知市の補

助を受け、いろいろな講習会を行ってきましたが、実施の中止又は延期を余儀なくされたり、実施しても一時的な増員に過ぎず定着して続けるのは難しく思えました。

そして体育会の活動としては、10月に実施している地区民運動会では当初、最大20地区で応援者も含めて約600人超の参加者で開催していましたが、直近の平成30年には6地区250人程度となり、コロナが収まっても以前のように戻るとは思えません。

また、高知市主催の『地区対抗スポーツ大会』には専門部が各種目に参加していましたが、高

知市全体でも高齢化が進み参加チームがなく試合の組めない競技も増えてしまい、種目を減らして開催している状態です。

これからも核家族化が進み各家庭での娯楽の形態が変わる中で、体育会ができることは何かと考えると、やはりスポーツ活動の普及、発展を図ることをメインに、いかに地域住民の方々が気軽に参加できる企画や種目を考えるとともに、課題の広報活動を見直し老若男女を問わず一人でも多い住民の参加が実現できるように努力しなくてはと思います。



地区運動会(大津中学校)



バドミントン教室(大津小学校)



ゲートボール教室(大津長瀬公園)



グランドゴルフ教室(大津長瀬公園)



ターゲットボードゴルフ教室(大津長瀬公園)



ジョギング教室(大津小学校)



ゴルフ教室(クロマツゴルフ)



卓球教室(大津中学校)

大津地区タウンポリス

代表 田所 稔

大津地区タウンポリスは平成15年に発足した団体です。この時期大阪のある小学校で大きな事件がありました。この事件をきっかけに、当時、南国警察署の生活安全課係長さんの指導によりできたものです。

昭和47年に高知市に合併して、高知市東部のベッドタウンとして、村から町へと急速な速さで都市化が進み、マンション・アパート・量販店・娯楽施設・公共施設ができ、夜の街もにぎやかになり、少年犯罪も田舎型から都会型へと変化してきました。

そこで、できたのが初代「七人の侍」で、地域安全推進委員のメンバーで自主防犯活動をスタートしました。当初は歩いて巡回し防犯活動をしていましたが、活動するにつれメンバーも増え、平成15年10月14日名称を「大津関・長崎地区タウンポリス」としました。

平成17年8月には、タウンポリスの活動が認められ、公益社団法人高知県防犯協会から「青色回転灯パトロールカー」が貸与されました。

ここから大津地区タウンポリスは大きく育っていきました。徐々にメンバーも増え、平成20年7月28日、団体名を「大津地区タウンポリス」と改め15名で再始動しました。

週1回の通学路を中心としたパトロール活動・落書きの発見と落書き消し・大津駅駐輪場の整理整頓及び清掃活動等、車ならではの広範囲な活動ができるようになりました。

また、車の貸し出しを通じて、近隣地区とのつながりができるようになり、地域内の中学校夜間補導における共同パトロールや南国補導センターへ出向いての共同パトロールなども行っています。

現在も定例会を月1回行い、各種団体の活動状況・取り組みなどを話し合いながら、次月の活動計画を作成しています。

大津地区町内会連合会

～50年の歩み～

会長 藤岡 省次

大津地区町内会連合会は合併（昭和47年2月1日）後の昭和51年8月30日大津地区町内会連絡協議会（以下「連絡協議会」）として結成され、その後、大津地区町内会連合会（以下「連合会」）と改名され現在にいたっています。

連絡協議会の初代会長として山本堯茂氏が選任され、2代目：坂本禎男氏、3代目：澤田性一氏、4代目：橋田 稔氏、5代目：楠瀬守英氏、6代目：濱田りえ氏、7代目：住田冷子氏、8代目：藤岡省次と続いています。（高知市町内会連合会他調べ）

この50年の間に連合会は、'98豪雨での復旧及

び災害記録碑の建立（ふれあいセンター敷地内）、紀貫之船出地記念碑の小学校への移転、「よさこい高知国体」開催に伴う民泊受入れと大会ボランティアとして参加、大津／高知市合併30周年記念誌の発刊と販売等に取り組んできました。

現在、連合会は各種行事（舟入川一斉清掃・七河川一斉清掃・大津食品工業団地と学校通学路周辺の一斉清掃等）への参加協力の呼びかけ、連合会未加入の町内会へ加入の働きかけ、高知市消防団大津分団後援会・大津校区青少年育成協議会・大津体育会への助成などを行っています。

また、連合会の役員は、大津地区の各種団体や高知市町内会連合会に参加して町内会の意見を提言する他、高知市主催の勉強会にも出席しています。

連合会は、これからも大津地区の各団体と協力し情報交換しながら、大津地区が「安全で

住みよい街」になるために活動してまいります。皆様のご協力をお願いします。



通学路一斉清掃受付状況…約150人位集まりました



地域コミュニティ推進課主催・地域活動勉強中

土佐大津戦没者 慰霊祭執行委員会

会長 安松 幹夫

大津の慰霊祭は、古く昭和28年3月に、舟戸岩崎山に忠魂碑が建設された時から始まり、祖国に殉じた戦士の霊を慰め、戦士の遺徳をしのぶ祭りとして続けています。

忠魂碑には、界事件から、日清日露の役、上海事変、支那事変、そして大東亜戦争において、祖国に殉じた103柱の戦士の御霊をお祭りしています。

慰霊祭は、毎年春秋2回行っていましたが、現在は秋1回、神式と仏式の両方で、執行委員会役員及び高知市消防団大津分団員の協力で

お祭りを行っています。

また、毎月1回、旧大津村の8地区(長崎、関、北浦、舟戸、鹿兒、田辺島東組、田辺島中組、田辺島西組)が交代で忠魂墓地の清掃を行っています。

戦後既に77年、国民の大半が戦争を知らない世代になりました。真の反戦論者は英霊の方々ではないでしょうか。「戦争をしてはならない。」「戦争を再びしない。」このことを守り続けて行くためにも、この慰霊祭を続けて行かなければならない、と考えております。

令和3年4月、遺族会の活動に取り組んでおられた澤本幸一様をご逝去されました。澤本様は、二度と戦争を繰り返さない、との強い思いを持って活動されておられたことと思います。心からご冥福をお祈りいたします。



日本赤十字社大津分区の活動

分区長 高村 宏

【日本赤十字社とは】

日本赤十字社は、今をさかのぼること145年前の明治10(1877)年、西南戦争において敵味方の区別なく負傷者の救護活動を行った「博愛社」として発足し、社名が「日本赤十字社」となった明治20(1887)年には、高知県においても、日本赤十字社高知県支部が創設され、135年の年月が経過しています。

日清、日露戦争や2度の世界大戦などの戦時救護をはじめ、関東、阪神淡路、東日本大震災などの平時の災害救護活動により、多くの傷病者の救護にあたってきました。

また、日本赤十字社には、赤十字病院をはじめ、血液センター、看護師を養成する看護専門学校、乳児院等の社会福祉施設などの施設があり、これらは一部の本社直轄のものを除いて、それぞれの支部に属しています。

数多くの先人達によって築かれてきた赤十字運動は、「わたしたちは、苦しんでいる人々を救いたいという想いを結集し、いかなる状況下であっても、人間のいのちと健康、尊厳を守る」という日本赤十字社の使命として引き継がれています。

【大津分区の活動】

大津の赤十字活動に忘れてはならない方は、坂本小之さんです。昭和23(1948)年から大津村役場に勤務され、大津保育園の開園に尽力し、園長として多くの卒園児を送り出しました。私もお世話になった一人です。

戦後の混乱期の中で、県下で真っ先に共同募金の目標を達成するなど、いろんな助け合い事業に力を注ぎ、日赤大津分区を立ち上げていただいた方です。その後も沢山の方々が活動を引き継いで現在に至っています。

コロナ禍で、日赤高知県支部等の研修会等の開催は少なくなっていますが、大津分区では、これから起こるであろう南海地震にむけて多くの方に防災意識を喚起してもらうために、「避難所運営ゲーム」や「災害時図上訓練」、小中学生には炊き出し実演などを地域防災会、高知市消防団大津分団と協力して行っています。

また、災害の被害は平時の備え次第で結果が大きく変わるので、新たな取り組みとして、これからを担っていく若い世代の方を中心に、日常生活の中で「気づき・考え・実行する」ということを広報していきます。

これからも赤十字の活動を推進していくために、皆様からの継続したご支援が必要です。

今後とも赤十字の意義や活動についてご理解をいただき、なお一層のご協力をお願いします。

舟入川を美しくする会

会長 今村 隆一

私がこの会と出会ったのは平成17年でした。当時、この会は、役員と大津及び高須地区の土木委員、町内会長、公民館長などが会員となっていました。私は、関町内会長とし

て会員に登録されることになりました。

大津地区・高須地区を横断する舟入川は、ご存じのとおり江戸時代の土佐藩家老野中兼山が築造した堀川で、香長平野を潤し、物流の面でも重責を担っていました。私が小中学生の頃は水泳、魚取りなどで楽しんだものでした。また、長い丸太をつないだ筏が流れて

来て友達と乗り移り遊んでいて、操作するおっさんに怒られたことを覚えています。

大津の住民に親しまれ利用されてきた舟入川ですが、生活様式の変化により廃棄物が舟入川を汚すようになり、見かねた流域の住民たちが清掃活動を行いながら、有志たちが立ち上がり昭和50年に「舟入川をきれいにする会」を発足させています。初代会長は、高村誠一氏でした。

平成18年には、昭和59年から2代目会長を務めてこられた田所豊稲氏が退任し、楠瀬守英氏にバトンタッチされました。この頃、当会の名称が「舟入川を美しくする会」に変更されました。平成25年になり楠瀬会長が退任し、次期会長に今村が指名され、その年の総会で承認されました。

主な年間事業は、3月の川干（※）の期間中の日曜日に実施する「舟入川一斉清掃」と、高知市の実行委員会が主催し7月の日曜日に実施される「浦戸湾・七河川一斉清掃」です。

3月の舟入川一斉清掃は、当会が独自に実施しているものです。

また、浦戸湾・七河川一斉清掃は、高知市制百周年記念事業として平成元年から始まり、実行委員会の会長は高知市長で、浦戸湾と七河川に設けられる13の本部のうち、舟入川本部は当会の会長が本部長に委嘱されています。

舟入川本部は、新平田橋から舟入川橋までが担当区域で、大津地区は、新平田橋から鹿見橋の川下の田辺島排水機場までで、それより川下が高須地区の担当となっています。

一斉清掃の実施前には、町内会長等会員と打合会を行い、一斉清掃の実施要領の周知を図るとともに住民の協力を依頼しています。

夏の浦戸湾・七河川一斉清掃の打合会のときに当会の総会も開催しており、決算報告・予算（案）等について協議しています。

清掃用資材のうちタオル・軍手は、高知県のリバーボランティア支援事業により高知県土木事務所から、ゴミ袋その他は高知市民憲章推進協議会より提供されており、各町内会の要望に極力応じるように配布しています。

一斉清掃以外の事業として、平成18年には、高知県土木事務所の許可を得て、舟入川美化啓蒙ポスターを清掃範囲の堤防両岸の歩道側のコンクリート面に適宜間隔を置いて35か所取り付けました。ポスターの原画は大津小学校4年生に書いてもらい「私たちの川を汚さないようにしよう」とのメッセージが表現されています。

その後、時間の経過とともにポスターが色あせてきたので、平成30年に、大津小学校4年生に15枚、大津中学校美術部と高須小学校4年生にそれぞれ10枚の原画を依頼し、新しくポスターを作成し張り替えました。高須小学校4年生が作成した原画分は、高須地区の堤防に設置しました。

ポスターに子供たちが思い描いた美しい舟入川となるよう、地域住民の協力によりいつまでも癒やしの川として、舟入川を守り続けてゆきたいと思います。

※ 川干：毎年3月1日から9日までの間、舟入川上流の山田堰で水止めを行い、農業用排水路の点検や補修、堆積した土砂等の撤去を行っている。また、大津では、期間中の日曜日に住民参加で舟入川周辺の一斉清掃も行っている。



大津文化祭実行委員会

会長 濱田 敏裕

大津文化祭は平成2(1990)年に第1回が開催されたので、正に平成の時代とともに回を重ねてきたことになる。第1回から第3回までは、舞台部門を大津地区センター(現大津ふれあいセンター)で、展示部門を大津農協出荷場(現JA高知市大津支所)で開催していたが、第4回からは大津小学校体育館をお借りしての開催となった。

第1回から第12回までは、大平武夫氏が会長を務め、13回からは私が会長を務めている。大平武夫氏は県展洋画部門で無鑑査、また高知市展審査員を務めるという高知県芸術界の一翼を担う芸術家であった。

その大平武夫氏が高齢になり、後継者を誰にするかという流れの中、無芸の私に何故か大役が回ってきた。第13回文化祭開催の折、来賓で来場されていた松尾徹人氏(当時の高知市長)に、「新しい会長さんはどのようなご趣味をお持ちですか」と問われ、赤面したことを今でもありありと記憶している。その後、会長として何か作品を出品しなくてはと一念発起し、父が趣味としていた写真を撮ることにした。それ

以降、お茶濁し程度の作品を出品し、何とか体裁を取り繕ってきたという次第である。

初めての会長として開催した第13回文化祭は、自分にとっては試練そのものであった。それまで、会長職を引き継ぐという目で、準備会に出席していた訳でもなく、会場設営に参加していただけた人間が、全体を指揮しなくてはならない状況に突然置かれたので当然のことである。当時、44歳だったので若気の過ちとはいえないと思うが、今考えれば非常に無鉄砲極まりない会長就任であった。

大津文化祭実行委員会会長として、大津文化祭を客観的に評価したら、開催には多大なる労力と時間がかかるというのが本音のところである。11月開催が多いので、7月中旬には動きださなくてはならない。まずは、開催に向けてのスケジュール決定、作品出品の募集、舞台部門出演の募集、出店の募集を行い、募集が終了次第、個々の会を開催しスケジュールを組み、それからプログラム作成に入ることになる。

このプログラム作成は、第20回ぐらいまでは出版社に委託して印刷してもらっていたが、資金繰りが困難になり、自分達で印刷・製本を手掛けるようになった。確かに出費はかなり抑えられるものの、プログラムを作成する手間は膨

出来上がった小冊子はオーテピアや地域の主だった団体に寄贈し、希望する方々には実費で頒布している。

今後も大津地域の文化交流と親睦を目指し、

継続して刊行していきたいと考えている。大津地域にお住まいの方々や地域にゆかりのある方々の投稿を大いに期待している。

「文集おおつ」から「文芸おおつ」への歩み

号数	誌名	発行年月	ページ数	執筆者数
20	文集おおつ	平成24年10月	137	37
21	文芸おおつ	平成27年11月	98	35
22	文芸おおつ	平成28年11月	110	37
23	文芸おおつ	平成29年11月	122	42
24	文芸おおつ	平成30年11月	114	37
25	文芸おおつ	令和2年1月	103	27
26	文芸おおつ	令和2年12月	63	14
27	文芸おおつ	令和4年1月	79	13
28	文芸おおつ	令和4年11月	91	22

大津地区暴力追放推進協議会

会長 山添 真次郎

【歩み】

「パン、パン!!」昭和63年1月30日、大津乙のマンション2階の一室と玄関に、ヤクザ風の男が発砲、逃走する事件が発生。同じ階の暴力団事務所を狙ったが、間違っ隣りの市民の部屋に発砲した事件と判明した。

地域の有志が立ち上がり、暴力排除運動、暴力団事務所退去運動を起こした。2年程を要して、マンションのオーナー、地域住民、南国警察署との連携、粘り強い住民運動により、暴力団事務所の排除に成功した。

しかし、気を許せば、いつ同様の状況が再現するかも知れず、地域の安心・安全に貢献できるように、大津地区の各種団体の代表者及び

個人で協議会を設立し、平成9年より活動している。

【活動内容】

平成10年からは、大津地区町内会連合会の援助により、大津駐在所連絡協議会と合同イベントの開催、暴排グッズ・パンフレット等配布、広報活動、大津校区交通安全会議・大津駐在所連絡協議会と合同で地域のカーブミラー清掃、近隣の介良、一宮、下知地区の暴力追放運動への協力を行っている。

平成26年には、高知東警察署の新設に伴い、高知東警察署管内暴力排除運動推進協議会の設立とともに、大津地区暴力追放推進協議会のメンバーを会員として登録し、ともに地域の暴力排除に取り組んでいる。

また、暴力追放高知市民会議、高知県暴力排除運動推進連合会にも参加、高知県市民総

決起大会・パレードにも参加、地域の関係機関、暴力追放高知県民センターと連携して、地域の安心・安全に取り組んでいる。

高知県下でも、県警、暴追センターの様々な施策、活動等で、市民意識の高まりとともに、暴力団封じ込めの取り組みが進んでいる。これからも大津地区の安心・安全のために、暴力団

排除「RYOMA」宣言をするぜよ!!

R 「暴力団を」利用したらいかんぜよ!!

Y 「暴力団を」許したらいかんぜよ!!

O 「暴力団を」恐れたらいかんぜよ!!

M 「暴力団に」MONEY（お金）を出したらいかんぜよ!!

A 安心・安全な大津にするぜよ!!

大津民具館保存会

館長 田所 稔

大津民具館は、高知市大津地区がまだ長岡郡大津村であった昭和41年11月1日、岩崎山中腹に開館した。その時の村長徳弘勝氏は、明治45年生まれ、土陽新聞、大阪毎日新聞記者を経て旧満州国協和会本部に就職後応召、シベリア抑留ののち昭和23年に帰国。昭和26年から5期20年間大津村の村長を務めた人物である。

徳弘村長は、民具館構想の直接のきっかけとして、梶原村民具博物館（現梶原町立歴史民俗資料館）訪問時に深い感銘を受けたことを回想して、「私たちの遠い祖先が日常生活の必要から製作し、使用してきた伝承的道具や造形物を総称して私たちは今それを民具と呼んでいるが、民具というこの耳慣れない道具に、私たちは祖先の生活の知恵をみることができる。芸術文化財と違って骨董品の価値はないけれども、そこには暮らしの工夫があり、歴史的な価値がある。」と述べている。

徳弘村長は広く村民に民具の収集について呼びかけるとともに、自らも農家を訪ねて協力を要請した。また、県下の市町村長会などでも進んで発言を求め、大津民具館への民具の寄贈について要請した。そのため北川村・

梶原町・東津野村・大正町その他から、続々と民具が寄せられ、大津村分と合わせるとその数およそ700点、その半数の350点が開館時に展示された。そして昭和47年に高知市に合併し、民具館始め大津村の管轄する諸施設は高知市に引き継がれた。

平成3年春、大津民具館前の満開の桜の下で花見の会が開かれ、久しぶりに訪れた徳弘元村長を囲んで、思い出話に花が咲き「民具館をもう1度よみがえらせた。」ということで、全館の見直し作業として、平成3年の秋から民具の整理作業が始まった。

これは収蔵品1点ごとに整理カードを作成し、全体の把握をすることが目的であった。この作業には高知県立歴史民俗資料館の協力が得られ、同館の学芸員が指導に来てくれた。いろいろ苦勞をしながら、足かけ6年目の平成8年にいたってようやく基本的な記入が終わった。

そして平成10年10月30日から平成11年1月17日まで高知県立歴史民俗資料館にて開催された企画展『昔のくらしと道具-大津民具館の資料から-』に展示された。

現在、民具館は日常的には開館していないが、年1回2月頃、大津小学校3年生の社会見学の一環として開放する他、見学の希望には可能な限り対応している。

また、維持管理として、空気の乾燥している時期に館内の清掃と空気の入れ替え、年1

回の館内の消毒と随時周辺の草刈りなどを続けている。

大津地区民生委員児童委員協議会

会長 田所 稔

民生委員児童委員協議会は、一人ひとりの民生委員・児童委員（以下「民生委員」）を会員とする組織で、個々の委員活動を支える役割を果たしています。

大津地区民生委員児童委員協議会（以下「大津民児協」）では、月に1回「定例会」を開催し、民生委員同士の連携をはかるとともに、民生委員それぞれの活動を通じて把握する地域の課題を共有し、対応方法について検討しています。

また、民生委員の研修を実施する他、高知県や高知市の民生委員児童委員協議会連合会等が開催する研修会にも積極的に参加しています。

大津民児協では、毎年10月に敬老会を開

催していましたが、コロナ感染症の影響で3年間中止となり、対象者には記念品を配布させていただきました。

また、12月には、大津小学校3年生を対象に、餅つき・昔遊び・読み聞かせを行っていましたが、これもコロナ感染症の影響で3年間中止になりました。

コロナ感染症が落ち着いたら、敬老会も餅つき・昔遊び・読み聞かせも再開したいと考えています。

民生委員は、それぞれの地域において、地域住民の立場から生活や福祉全般に関する相談・援助活動を行なっています。

高齢者や障害をお持ちの方への支援が必要などとき、子育てや介護での心配ごとや困ったことがあるときは、お住まいの地域の民生委員へお気軽にご相談ください。

大津地区老人クラブ連合会

会長 藤岡 省次

大津村と高知市の合併が昭和47年2月1日ですから、その10年前に老人クラブ「大津村春秋会」が発足し、名を変えながら現在の「大津地区老人クラブ連合会」（以下「連合会」）へと続いています。

令和4年度の単位老人クラブ数は、長崎、関、北浦、舟戸、もみじ野、鹿兒、茶山、田辺島が2つで9クラブ、会員数は約370人となっています。

ここで、歴代会長を紹介しておきます。

初代会長：土居稲生氏、2代目：杉村吉朗氏、3代目：松岡松井氏、4代目：山本 寛氏、

5代目：山本堯茂氏、6代目：濱 明義氏、7代目：永野 忠氏、8代目：井上春男氏、9代目：今村隆一氏、10代目：藤岡省次と続いて、6代目会長の時、連合会会則を新たに作成し現在に至っています。

平成25年に開催された「ねんりんピックよさこい高知」では、前年には熊本大会の視察、翌年は、本番での高知県老人クラブ連合会からの人員派遣要請への対応、会場設営の手伝いと苦労しました。

9代目会長の頃に、それまで各単位老人クラブに分配していた高知県共同募金会の地域団体活動育成助成金を地域との連携に使うようにし、大津小1年生との昔遊び（それまでは関老人クラブが中心となり取組んでいた）

に連合会として取組むようにしました。

また、単位老人クラブでは、百歳体操、道路や大津駅の清掃、研修旅行や遠足等を行っている所もあります。

順風満帆のなか突然のコロナ禍（令和2年1月国内発症）で、各種行事が中止になっています。コロナ禍の終息と再開を願うばかりです。

最後に、連合会と大津中央公民館との関係についてしたためておきます。

昭和50年1月に、旧大津保育所の建物を活用して「老人憩の家」が設置され、老人クラブが活動の拠点として使用していました。しかし、大津小学校のグランド拡張に伴い、平成4年1月に廃止となり、以後、老人クラブは、旧大津村役場の敷地にあった大津公民館を借りて活動していました。

しかし、これも舟入川改修工事の関連で、旧役場前道路が拡張されることになり、4代

目会長の頃、旧村役場と公民館他が取り壊されました。

高齢者の活動拠点がなくなったため、連合会から大津地域振興懇話会（以下「懇話会」）に要望した結果、懇話会が役場跡地を高知市から借地し、建物は高知市の補助金を活用して公民館を建設してくれました。（平成3年12月13日完成）

建物の管理運営は、懇話会から連合会に委託されることとなり、委託契約書（平成3年12月27日付け・契約は1年ごとに自動継続・修理補修等は連合会が負担他）を交わし、それを受けて大津中央公民館の規約（平成4年1月1日施行）を作成し、連合会の役員が公民館の役員を兼務しながら、現在も運営管理を続けています。なお、懇話会は既に解散しており、現在では、高知市との大津中央公民館が借地契約を交わしています。



連合会主催「大津小1年生（約100人）と昔遊び」



大津中生徒部による大津保育園での防犯啓発劇（連合会後援）の様子

大津の未来

災害に対する心構え

大津地区地域防災会 会長 濱田 敏裕

令和3年2月民生委員の方をお願いして、高知市広報「あかるいまち」の配布時に、「大津地区における災害対応への指針」という小冊子を大津地区全戸に届けて頂いた。これは、南海トラフ地震に対するためにどうしたら良いのかを時間経過に沿って示したものである。当然のことながら、これは単なる指針という一種の情報でしかない。

個々人における災害への備えとしての第一歩は何が必要なのであろうか。それは日常生活の中に、非日常である「災害」というものを少しでも自分の中に配置することではないかと私は考えている。

日常生活の中に、非日常を意識することは簡単なことではない。けれども、これがなければ災害発生時から始まる一連のサバイバルの中で生き残ることは難しい。

しかし、ちょっと考えてほしい。皆様は、このコロナという一種の災害とっていいほどの過酷な試練の中で現在生活を余儀なくされている。それも暑い真夏の下でも、マスクを着けての社会活動を行っている。(8月のお盆休みに執筆中) 確かに、大変なことではあるが、考え方を少し変えたら決して難しいことではないと思う。

では、日常生活の中に、非日常であることの災害というものを配置できたとして、次はどう進むのであろうか。まずは、地震の揺れ、それに続く津波から、自分の命、家族の命をどう守るかである。次には、災害が発生してからの自分・家族生活をイメージーション、つまり想像することが必要になる。

この時点で、個々人、個々の家庭単位で色々な行動パターンを考えなくてはならない。一番大きな要素は災害発生後、避難所での生活に

なるのか、それとも自宅での生活になるのか、車中泊の生活になるのかである。それぞれ、メリット、デメリットがあるが、平時にいずれもそれなりの準備が必要となる。

さらには、それに沿った備蓄品の準備も必要となる。災害という厳しい環境の中でよりストレスのかからない環境を作ろうと考えた場合、災害後の生活をより日頃の生活に近づけるという経験値を上げるという一点に尽きるのではないだろうか。他にも、家族構成、ペットを飼っているかどうかなど、色々な要素が入ってくるので、個々の家庭で話し合っ、ある程度の備えをしておくことが不可欠となる。

災害時には、「自助」「共助」「公助」という3つの助が機能する。前述したことから、皆さんもうお気づきのことと思うが、災害、特に南海トラフ地震のような大規模災害が発生した場合は間違いなく「自助」が最も必要な助となる。

東日本大震災でもいわれているように「津波でんでんこ」の世界である。非情にも聞こえるが、実際これに反して我が子を学校に迎えに行った保護者が多数津波に飲み込まれ、尊い命を失っている。まずは、それぞれ自己の命を守ることが第一義であり、それから家族の命、それから隣人の命に繋がっていくのである。

つまりは、「自助」なくしては「共助」はあり得ないのである。災害時に過度の「公助」を期待してはいけないと思う。やはり、あくまでも自分のテリトリーは自分の力で守るという事前の想いが必要ではないかと思う。地域防災、いや地域減災、縮災という概念も同様のことと思う。

皆様ご存じのように、日本の地震への取組システムは東日本大震災で大きく変化した。高知市の中でも、この大津の地でいち早く連合防災会が立ち上がったのも、東日本大震災によるシステム変更で問題点が生じたためである。一番大きな問題点は大津小学校が津波避難ビルの指定を喪失したことであった。

当時大津小学校の校長であった西尾豊子先生から、平成23年4月のある朝、電話をいただいた。話の内容は、大津小学校は3階部分が狭く、2階部分まで津波により浸水する可能性がある状況で、子供たちが避難するスペースが確保できないという旨の相談であった。

学校自体が津波避難ビルの指定を解除されたとなると、当然のことながら南海トラフ規模の地震が発生した場合、児童は他の津波避難場所に急遽移動することが必要となる。しかしながら、この移動という行為は非常に危険性を伴う。

このような案件に対応するためには、町内会単位での自主防災組織では対応できず、その年7月に大津地区全域の防災システムを管理するための大津地区地域防災会が発足した。

大津地区地域防災会の活動として真っ先に取り組んだことは、大津小学校を津波避難ビルとしての指定を受けることであった。

そのため、地域住民の方々をお願いをして陳情のための署名活動を実施した。高知市行政ならびに高知市議会に陳情した結果、小学校屋上部への避難階段が設置され、屋上部の避難場所としての整備も施工された。これらによ

り、大津小学校は津波避難場所として再指定を受けることとなった。

地震、それに伴う津波被害の特性は当然その規模によって左右されるが、発生時間によっても大きな変化を生む。前述させていただいたように、まずは災害を日々の生活に多少なりとも組み込み、それを個々の中でシミュレーションを重ね、徐々に「自助」の領域をグレードアップしていくしかないと考えている。

災害直接死、災害関連死を少しでも減らすという減災、縮災はこれなくしてはあり得ない。個々の力が集まらないと、大きな力にはなり得ない。

末筆となるが、尾崎正直衆議院議員は高知県知事時代にこういていた。「来る南海トラフ地震には、高知県民の総力戦で立ち向かわなくてはならない」と。

私も同様に考えている。個々人が平時からできる範囲でいいので、物資の備蓄と精神力の備蓄をお願いしたい。避難所運営に関しても、運営自体はその場に避難している人の手で運営していかななくてはならない。そこに居住する全員の力により、避難所の生活は成り立つことになる。

国分川・舟入川の 堤防耐震化について

高知県土木部河川課

南海トラフで発生する地震は今後30年以内に発生する確率が70~80%にまで上昇しています。

このため、県人口が集中し、経済・都市機能が集中する県都高知市の被害を少なくし、また復興を早期に行うために、現在、国分川、舟入川をはじめとする浦戸湾に流入する河川において南海トラフ地震対策として堤防の耐震化を進めています。

総延長としては約27kmが対策必要か所となっており、このうち国分川で約7km、舟入川で約5kmの耐震化を進めています。

この事業は、地震時に堤防が倒壊したり、大きく沈下するのを防ぐため、矢板の打ち込みなどを行うことで堤防の耐震化を図る工事です。

工事か所は、人家や生活道に隣接していることから、工事中は地域の皆様にはご不便をおかけしますが、ご協力よろしくお願ひします。

地震時に発生する津波の大きさによっては堤防を越えてくることもあり、地震発生時に

は、まず避難をしていただくようお願いいたします。

また、近年の気候変動などにより、雨の降

り方なども極端になっております。気象情報などには注意していただき、避難が必要な場合には早め早めの避難をお願いします。



矢板打設状況(舟入川において)

水道事業の歩みと 変わりゆく時代への挑戦

高知市上下水道局水道整備課

<はじめに>

本市の水道事業は、大正14（1925）年4月に鏡川を水源として通水を開始し、戦禍や昭和南海地震などの困難期を乗り越え、その後の目覚ましい都市の発展を下支えするため、計4期にわたる拡張事業による施設整備を繰り返しながら、安定的な事業運営を確立することができました。

しかしながら、現在においては急速に進展する人口減少への対応や施設の老朽化対策、切迫する南海トラフ地震への対応など、新たな局面を迎えており、上下水道局では「安心と信頼を未来につなぐ高知の水道」を基本理念に掲げながら、水道水の安定供給に資する様々な施策を展開しているところです。

<水道水をお届けするまで>

本市の水源は、鏡川水系、仁淀川水系、吉野川水系の3つの水系の異なる河川水源を主なものとしていますが、現在、大津地区の皆様にお届けしている水道水は、主に仁淀川の地下を流れる伏流水（河川の下層の砂礫層などを流れる水）と布師田水源の良質な地下水を原水としています。

特に仁淀川は、国土交通省が毎年実施している水質調査において、『水質が最も良好な河川』に幾度となく選ばれるなど、全国的にみても非常に良好な水質です。この自然豊かな原水を針木浄水場において、厳格な水質管理体制のもとに浄水処理された水道水は、高知の「おいしい水」として評されています。

その後、浄水処理された水道水は浄水場を出発し、「送水管」を通り、いつでも安定的に供給できるよう水道水を貯水している「大津配水池」に送られた後、道路の下に張り巡

らされた「配水管」を通じて大津地区の皆様のお宅にお届けしています。

<南海トラフ地震対策の重点化>

本市の多くの水道施設は、昭和50年代前半に整備された施設が多く、現代の耐震基準に照らして耐震性能が不足していることから、南海トラフ地震が発生した場合には、水道施設が被災し、長期間にわたる断水被害が生じる恐れがありました。そのため、上下水道局では令和4（2022）年度までの期間を南海トラフ地震対策の「集中投資期間」と位置付け、耐震化事業に全力で取り組んできた結果、浄水場や主要な配水池などの水道システム上、重要な機能を担う基幹施設については、全て耐震化が完了しています。

その主要な配水池の一つである大津配水池についても、建設後40年以上が経過し、耐震性も不足していたことから、平成28（2016）年度に最新の耐震基準に基づき更新工事に着手し、平成31（2019）年3月に工事が完成しています。新しい大津配水池には、地震時に揺れなどを感知すると自動的に管路を遮断し、飲料水を貯留する「緊急遮断弁」を新たに設置するとともに、応急給水のための資機材の配備も完了し、災害時に頼りになる「応急給水拠点」へと生まれ変わりました。

管路施設につきましては、配水池の整備に合わせて耐震管を布設すると同時に被災時に使用できる応急給水栓の整備を行ってきたところですが、引き続き重要な基幹管路や水理機能上の重要度などを総合的に考慮し、優先順位をつけながら計画的に耐震管への布設替を行ってまいります。

※**応急給水拠点**：大きな災害などにより、管路が被災し広域的な断水が発生した場合に、市民の皆様へ直接、飲料水を配ったり、給水車の給水基地となる防災上、重要な拠点のこと。

◆緊急遮断弁の仕組み（断水発生時）



<水需要の減少に対応した取組み>

大津配水池の更新の際には、近年の水需要の減少に対応するため最適な施設能力に見直ししており、従来の配水池が貯水容量7,000m³の1池1槽構造であったものを、貯水容量2,000m³と3,000m³の2池構造に変更するとともに、2,000m³のダウンサイジングを実施することにより、施設の効率的かつ安定的な運転が図られています。

◆更新に併せた配水池容量のダウンサイジング



<おわりに>

本市の水道事業は、令和7（2025）年に通水100周年を迎えますが、本市の水道の歴史のその半分の期間は大津地区の皆様とともに歩んでまいりました。次の50年、100年の新たな時代に向けて大津地区の皆様をはじめ、全てのお客様とこれまで築いてきた「安心」と「信頼」を着実に未来につなぐ水道事業を目指して、これからも「変わりゆく時代」への挑戦を続けてまいります。

※ 令和4年9月、大津小学校6年生を対象に「特別授業」を行いました。

授業では、昭和49(1974)年と平成12(2000)年の大津小学校周辺の航空写真を比べると、以前はほとんど田んぼだったのが今は住宅だらけになっていることや、'98豪雨の被災状況などを見てもらいました、また、私が小学生の頃は舟入川で泳いでいたことなどを話して、これからの大津はどんなになってほしいか聞いてみました。

大津の未来について、いろいろな意見があった中で、一部の児童の作文を本人の承諾を得て掲載しました。

田所 稔

大津の未来について

大津小学校6年生

今日のお話で、今も自然豊かな高知市大津ですが、昔の旧大津村の時代はもっと自然豊かだったということがわかりました。川もきれいで魚がいっぱいいるし、木もきれいでいれられていたということもわかりました。

しかし、今の山を見てみると倒木があったり、いまにも倒れそうな木もありました。そして、川にいる魚の種類も減り、昔のようなきれいで自然豊かではありません。なのに、様々な人たちが、地面をコンクリートに、木を倒し、他にも川にポイ捨てして行ったりする人も増えてきています。

それではいけない!と立ち上がった人がいても、その人たちでは直しきることはできない……。

これからの大津は、その立ち上がった人をきっかけに、この自然を守り、そして直すことを増やしていき、さらに自然に被害が加わらない公共交通も守っていかたいと思います。どうして、守りたいかという、最近公共交通の会社が多額の赤字になり、なくなりそうだからです。そのためにも乗っていきたいと思います。そして、大津の自然を守る活動に参加したいです。

今回のお話、ありがとうございました。

ほくの思うこれからの大津は、ここに住む

一人ひとりが笑顔で明るいような大津であるようにしたいです。

理由は二つあります。一つ目は、明るく楽しい大津がいいからです。人はよろこんだり明るい気持ちの時は、まわりも明るく、楽しくなるので、そのような大津がよかったからです。

二つ目は、平和なことが一番だからです。警察は、いけないことをしたり、悪いことをする人がいるからあるというのが、一つあります。そしてそういう人がいるから平和にならず、かなしむ人がいるので、平和にして明るくしたいと思いました。このようなことをきいたので、ほくも明るくできるようとりくみます。

このように、ほくは、明るい大津にしたいので、自分でも、明るくできるようにがんばります。

私は、田所さんの説明の中で、昔の大津についてのところが心に残りました。今の大津小と昔の大津小の写真を見比べてみて、昔の方は自然豊かで、まわりに田んぼがたくさんあることがわかりました。今も自然はあるけれど、家などが多くなっていて、減っていると思いました。

私は、大津の未来について、まず舟入川をきれいにしたいと思いました。昔は泳げるくらいきれいだったそうなので、そのころみたいになれるようにしたいです。ポイ捨てをし

ている人がいたら注意したいです。

他にも、皆が楽しくらせるように、公園ももっときれいにしたらいいと思いました。大津を、笑顔あふれる明るい町にしたいです。

大津はとてもいいところだけれど、田所さんの話を聞いて、もっと良くするための改ぜん点もあることが分かったので、さらに大津を良くしていきたいと思いました。

そのために、私たちも何か協力したいなあと思いました。たまに公園でゴミを見かけることがあって、友達はそのを持って帰って家で捨てていたので、私も、ゴミがおちていたら積極的にひろって持って帰ろうと思います。それだけでも、けっこうきれいになると思ったからです。

あと、田所さんもおっしゃっていたように、舟入川をきれいにする取り組みとかもあるみたいなので、もし、またあれば参加したいです。

これから、大津が持続可能な良い地域になるように、私たちで環境を守っていきたいです。

私は、今日の総合で、大津の歴史や自然がどうなっているかということを読んで、本当は身近な課題なのになぜか遠くに感じてしまうようなものがあって、常に自分たちが負うリスクを考えなければいけないなと思いました。

そして、すっかり汚れてしまった舟入川も今ならまだきれいにすることができるという希望もあるということが分かりました。

また、高知で起きた「'98豪雨」の天災が、大きな被害をもたらしたことを聞いて、これから起きる天災を、天災にはいけないなと考えました。理由は、「天災は忘れられたころ来る」という言葉もあるけれど、そのままではもっと大きな被害がおきてしまうの

で、備えて身を守ることが大切と感じたからです。

こんなことを考えながら、ふと気づきました。それは、大きな災害で大きな被害が出た場合、大津の町は住めなくなってしまうということです。いつまでも大津地区を残すためには、みんなとの協力でピンチを乗り越えることが重要になるのではないかと思います。

そこで私は、舟入川や国分川をきれいにする意識を高めたり、大津が抱える課題の解決策を考えたりして、私が今できる精一杯を大津やみんなのために使いたいと思いました。

これから、大津の長い歴史を絶やさずに、もっと地元でこうけんしていこう!と思いました。そして、大津の町をより良くしていくために、少子化問題には公園をキレイに整備する、高齢化の問題には高齢者のニーズに応じて住みよい町にしたりするなどの案を、私たちが発信していきたいです。そうすれば、子供たちは大津の公園でよく遊ぶようになり、高齢者もここなら安心して過ごせるとなって大津の町がもっと快適になると思います。

私は今回、思ったり気づいたりしたことは二つあります。

一つ目は、今までの町です。田所さんもこの大津小だったとは知りませんでした。そのころは田や畑に囲まれていて、家もなかったのはおどろきました。そして、1998年に起きた'98豪雨のきっかけで、家など建てられだしたから、デメリットに考えずにメリットとして考えた方がいいんじゃないかなと思いました。

二つ目は舟入川についてです。どんな町になってほしいかみんなを出し合った時「きれいな町」という意見が多く出ていました。そ

の中でも舟入川を前のようにきれいにして泳ぎたいという意見もありました。

今の中学校1年生が小学校6年生だったときに、舟入川のことを紹介してくれていました。その時に水をにおってみると「うわ!!」と思わず口に出てしまいました。そうです。くさすぎたのです。だから今ふり返ってみると、舟入川はきれいにしないといけないと自分が育った町でもあるから強く思います。

私は、全体的に「きれいな町」「きれいな川」となり、みんなで安心・安全に、そして楽しく!!仲良く暮らしていけたらいいなと思います。そのために、自分にできる少しのことを探してやっていきたいです。少しずつやっていくことは最後花をさかせますから。

仲間と協力し合い、助け合い、手をとりあい、そして夢を事実に変えていきたいと、このことを学んで改めて思いました。

私は、きれいで自然が豊かな大津になってほしいです。公園に行ったときに、おやつのごみや、ペットボトルなどが落ちていることがあります。ごみが落ちていると、遊んでいるとき、気持ちが良くないです。だから、公園に行くときかばんにふくろを入れておいて、気づいたときに拾って、きれいな公園になってほしいです。

また、公園には、たくさん草が生えています。草は自然のものだけど、ぼうぼうになると走り回れる所がせまくなったり、人が遊ばなくなったりします。だから、自然を放置せず、手入れしたら、楽しく遊べたり、公園での交流が増えたり、見ていて嬉しかったり、明るくて心地良い町になると思います。

このように、皆が皆の場所を明るく保つ努力をすれば、きれいで心地良い町をつくることできると思います。私も遊びに行くときに、目に留まったごみは拾うように、そのつ

いでに少し雑草もぬいて、少しずつ心地良い大津をつくっていきたいです。

私は、田所さんの話を聞いて、今と昔を比べて良くなった所もあるけれど悪くなったこともあると思いました。

良くなったと思うことは、人が増えたことです。人が増えたおかげで、通学路を通る人もいて、私達は安心して、登下校できています。

悪くなったなと思うところは、舟入川の水がにごっていることです。昔は、泳げるほどきれいだったと聞いておどろきました。なので、そのきれいさをまたよみがえらせて、持続可能にできるように、自分達がポイすてをしないのはもちろん、呼びかけていくことも大切だなと思いました。

いつかはくるといわれている南海トラフ地震の対策に向けて、昔の人達が残してきてくれた記録を生かして、避難訓練をしっかりと意識して行っていきます。

大津の未来について、私はみんなが安心して暮らせて、協力・支え合い・助け合いができるような地区にしていきたいです。それだけでなく、地区を大切にできて、自然豊かな地区をめざしていきたいです。そのために、地域の人との交流を大事にして、あいさつなどの意識をしていきたいです。

自然は今も多いです。ですが人が入れる自然は、少ないです。ぼくは、管理をされている自然を多くしたいです。

一つ目は、舟入川です。父も大津出身です。このときの舟入川は、アシなどの草でいっぱい土手があったそうです。もし、舟入川に落ちることがあっても、その草々につかまれば、流されることは、ほぼありません。それに水もきれいになると思います。根から水を

吸ってくれるからです。

二つ目は、山です。高天ヶ原を中心に山が広がっています。ですが管理されていないので入れる所は、少ないです。だから管理されていて、子どもでも入れるような山になってほしいです。そうすると動物もふえます。

夏といえば「カブトムシ」などの虫もくるでしょう。管理されていると、人（子ども）なども入れます。カブトムシ目がけて人もあつまるでしょう。そうすると、もっと大切にしようという声もあがってくると思います。

大津の未来を変えるには、こんなことだけじゃありませんが、大津の未来のためにも、一つずつみんなでがんばっていきたいです。

私は、タイトルにもかいているように、ゴミが一つもなく、いつだれがみてもキレイな舟入川にしたいと思ったからです。

理由は二つあり、まず一つ目は、いつも学校から帰っている途中で舟入川をみているとペットボトルの空とかが流れていたり、プラスチック類などが特に多いからです。ゴミが流れているだけではなく、水もキレイではなくにごっているからです。

二つ目は、お母さんとかは昔大津小に通っていたらしくて、お母さんとそのお母さんの姉妹などから話をきいていたら、昔の舟入川はゴミもなくキレイで泳げるくらいとっていて、今はゴミなどが流れていて昔と今の現状がちがうからです。

大津をゴミのないキレイな町にするために、田所さんの話などをきいたりしてみて川にゴミをすてるとこんな川になってしまうというポスターをつくったり、まず日ごろから自分の身の回りのものからかたづけて、いらぬものは川ではなく、しっかりとゴミ箱などへすてるという意識をもっていたら良いと思います。

このようによびかけのポスターをつくったり、身の回りのものからかたづけてゴミ箱にすてたりして、今のSDGsの現状についても一度してもらえればキレイな大津になると思います。

私も川にすてている人がいたら注意などをしていきたいです。

私が考える未来の大津は、地震やそれによって起こる津波で大きな被害を受けた時、一人でも多くの人々が助かり一日でも早く復旧できる大津にしたいです。

理由は、二つあります。一つ目は、一人でも多く助かるためには、日ごろからひなん訓練や地域の人との関わりが大切です。そして、一人でも多くの人々が助かると、人数が多いため復旧に協力する人が増え復旧までの道のりが早くなると考えたからです。

二つ目は、今より安心して暮らせると思います。一人でも多くの人々が助かるためには、日ごろから地域の人との関わりが大切といただきましたが、それは「大きな」被害を受けた時だけでしょうか。そんなことはありません。困ったことがあれば気楽にいうことができるため、日々安心して暮らせます。災害のような大きい被害を負った時の対策は、日々生かすことができます。なので、安心して暮らせると考えました。

大津を一人でも多く助かり、一日でも早く復旧できる町にするためには、自分ができることを精一ぱいしたら良いと思います。例えば、家の中の家具を固定したら良いと思います。理由は、家具などを固定しておく人と家への被害が少しはなくなります。また、家の被害が減ると家をなおす時間をほかに使えるからです。

このように、地震や津波など大きな被害を負ってしまった時に一人でも多く一日でも早

く復旧できる大津にしたいです。

みなさんの理想の町とはなんですか?わたしの理想の町は、川がきれいでみんなが協力できる町です。今の大津は、地域の人との関わりは、少ないとわたしは思います。

なので、今わたし達にできる事は何かを考えてみたいと思います。わたし達は、毎朝だれかに会うと「おはようございます。」や「行ってきます。」と大きな声であいさつをしています。ですが、まだ声が小さくてあいさつが聞こえない人やあいさつをしない人が少ない

ます。そこで、あいさつ運動にみんなですっきり取り組んだり、わたしからあいさつをしていない人に「おはよう。」と声をかけたかなと思います。あいさつを大きな声でできるようになったら地域の行事に参加してみたり、地域の人（近所の人や知り合いなど）とお話ししてみたりすれば地域の人ともっと深い関わりを持てると思います。

大津という大切なわたし達のまちを守るためにもふだんから地域の人との関わりを深くして、いざという時に協力できるようにしたいです。

私たちの大津、これからの大津

大津中学校3年 池田 彩乃

私達の住む町、大津は素晴らしい所です。

川や山に囲まれているので、周囲からはいつも自然の音や鳥や虫の音が聞こえます。市街地から近く、歴史ある路面電車、バイパスも通っているので、外出だって簡単です。

大津は、土佐山や馬路村のように大きな森や特産品がある訳ではありません。かといって、都会のように、建ち並ぶビルや大きなショッピングモールがある訳でもありません。

でも、ここには生活に必要な物全てがあります。豊かな緑も活気づいた人々も。だからこそ、移住者も昔からここに住む人達も、大津を離れられないのでしょう。他にはない住みやすさ、それが大津の魅力です。

これは少し大げさないい方になるかもしれ

ませんが、私達の義務は、それを守り、伝えていくことだと思うのです。だから、私達は、学校等で地域のお店や稲作について、歴史について、防災について、たくさんのことを学びます。そして、さらに大津が好きになるのです。

もちろん伝承の中で、大津は時間とともに変化していくでしょう。工業団地が発達して日本有数の工業地帯になるかもしれません。はたまた、農業が発展して、一面に水田が広がる美しい風景を見ることができるようになるかもしれません。

ここに答えはありませんし、どんな未来が来ても、それは正解でしょう。ただ、私が想うのは、人々の暮らしの安寧が守られれば良いということだけです。

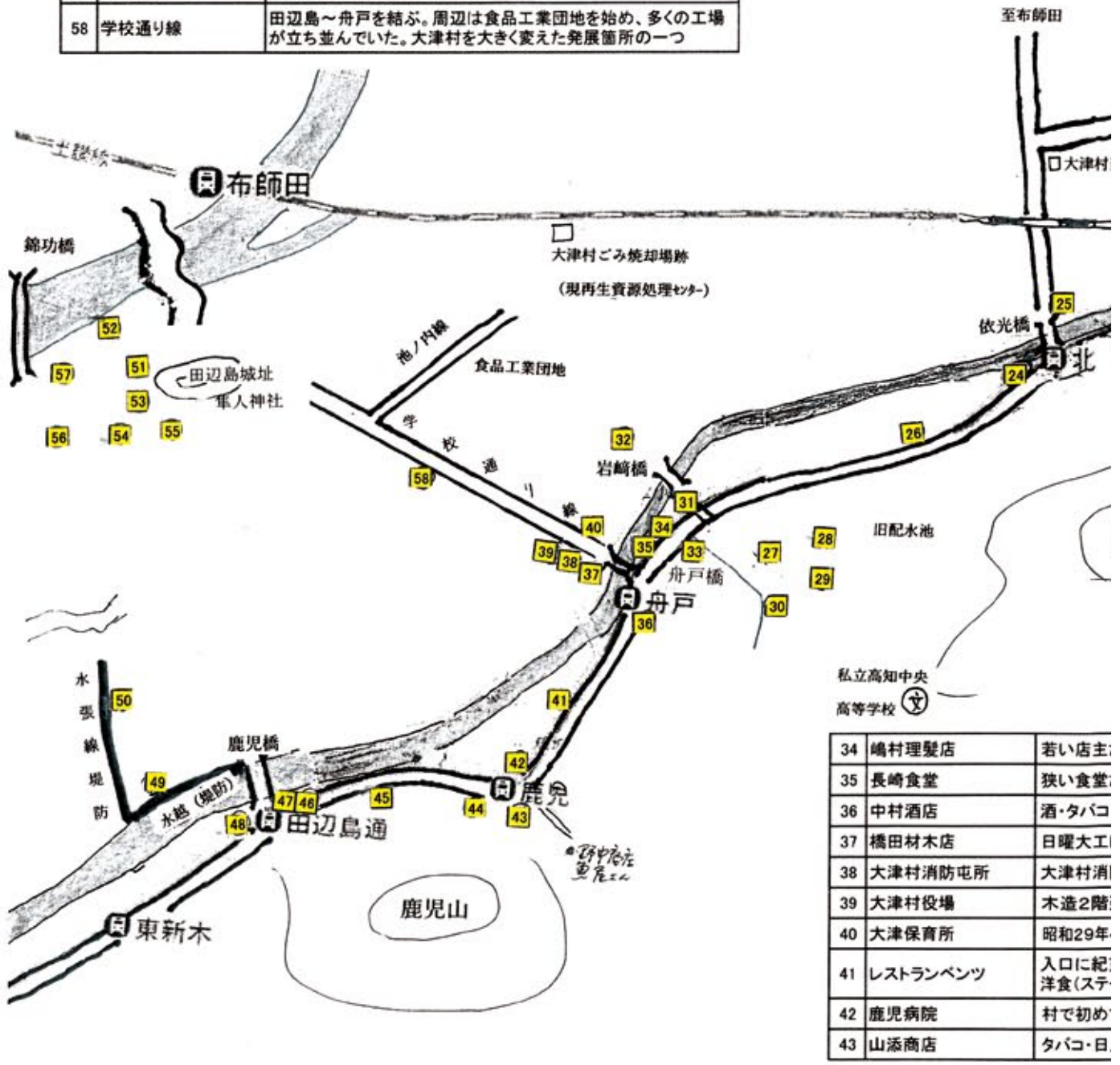
安心して暮らし、笑顔で明日を迎えられる場所、大津。この大津が何年たっても、私達とともにあり続けられるよう願います。

資料編

44	大津駐在所	駐在さん1名が村の治安を守ってくれた
45	鹿児神社	輪抜け様6/30、夏祭り7/19、秋祭り11/7 葛島～大津の人たちが集う
46	鹿児ストア	食料品・日用品販売
47	鍋島商店	衣料品販売
48	杉村理髪店	大津の西の端の散髪屋
49	水越堤防	被害を抑えるため洪水時に越水させるよう周囲より低くした堤防
50	水張り堤防	田辺島地区の水害を防ぐ高い堤防が続く
51	農協田辺島出張所	大津には専業農家が多かった
52	岡田医院(跡)	大津の西にあり小中学校の校医をしていた
53	大崎魚屋	川の魚もあった。皿鉢料理も作っていた
54	中野商店	タバコ・食料品
55	福永染物工場	ノボリ・フラフ染。田辺島に2軒の工場がある
56	田鍋染物工場	
57	西田舟大工	錦功橋の東。釣り船の製造・修理
58	学校通り線	田辺島～舟戸を結ぶ。周辺は食品工業団地を始め、多くの工場が立ち並んでいた。大津村を大きく変えた発展箇所の一つ

合併前の大津村

作・一柳 信幸 (誤差や)

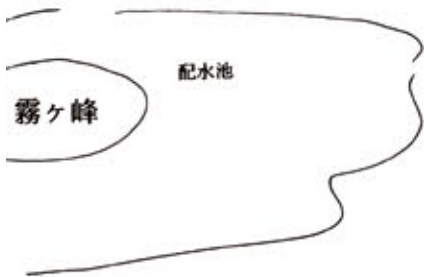
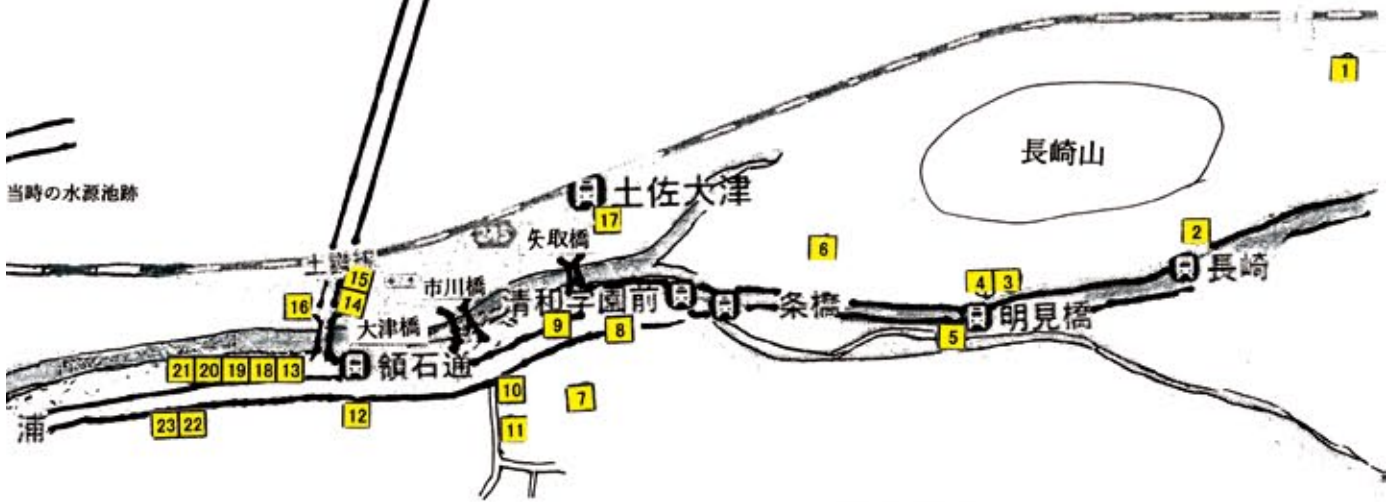


34	嶋村理髪店	若い店主
35	長崎食堂	狭い食堂
36	中村酒店	酒・タバコ
37	橋田材木店	日曜大工
38	大津村消防屯所	大津村消
39	大津村役場	木造2階
40	大津保育所	昭和29年
41	レストランベンツ	入口に紀洋食(ステ)
42	鹿児病院	村で初め
43	山添商店	タバコ・日

界限 (かいわい)

不正確な点はご了承ください

番号	店名・建物	コメント
1	大津一軒家	南国市の三軒屋の西に大津地区の一軒が離れて建っている
2	高村火薬店	産業火薬・花火・各銃器の弾を販売
3	池上酒店	酒・タバコ・食料品
4	西内理髪店	野球の好きな気のいいおじさん
5	中村鮮魚店	新鮮な魚があった。以前は鍛冶屋だった
6	笹岡建具店	建具・ふすま
7	古城八幡様	夏祭り・秋祭りがあった。みこしをかついで関・長崎地区を回った
8	大津自動車	地元の車修理店
9	一柳ブロック	ブロック製造。障害者の雇用をしてくれていた
10	大津郵便局	個人の敷地にあった。電話交換業務もしていた
11	西原魚屋	夫婦で経営。気のいい方
12	川村食堂	高齢2人で経営していた食堂。日用品も販売
13	田村酒店	酒・下駄・日用雑貨販売。一輪車で商品を配達してくれた



だった
だったが空腹を満たしてくれた
・食品・雑貨販売。一輪車で商品を役場へ運んでくれた
には欠かせない店。奥さんが店番をしていた
防団の拠点
建て
4月開設。定員90名
貫之船出の碑があった
一キ)や和食(真田そば)が旨かった
ての病院(現在の城東病院)
用雑貨販売

14	一柳建具店	建具・ふすま
15	元吉鍛工場	農機具・一般家庭用の刃物製造
16	高知新聞取扱所	朝刊・夕刊配達員が忙しく出入りしていた
17	国鉄土佐大津駅	駅員が駐在。高知通運(貨物)が隣接しており賑わっていた
18	池田タバコ食品	後には池田モータースになった
19	福田理髪店	福田のおんちゃんから秀島さんに引き継がれた
20	大津ストア	久尾さん経営。今のスーパー並みに多くの商品を扱っていた
21	大津村農業協同組合	電車軌道をはさんで北に事務所、南に倉庫があった
22	黒岩仕出し店	今で言う料亭のような店であった
23	杉村石灰工場	建物全体が真っ白。石を焼く臭いがいつもしていた
24	杉村タバコ店	タバコ・塩販売
25	山地商店	日用雑貨販売。布師田方面からの自転車預かりもしていた
26	松岡石油店	村で唯一のガソリンスタンド
27	忠霊碑	戦死者の碑
28	大津民具館	昔のいろいろな民具收藏。案内板の高松慕真氏の書は必見
29	高知県林業試験場	現在の大津保育所・教育センター付近に広い苗圃があった
30	永井医院	村東部村民の医療や健康管理を担った
31	西川製油所	食用油の工場
32	大津小学校・中学校	当時は棟続きの木造2階建て
33	三谷仕出し店	元気なご夫婦が経営



合併協定書に署名する(左から)坂本高知市長、古田大津村長、鍋島介良村長(高知市の電気ビルで)

来年一月合併へ

高知市と 大津、介良村 協定書に調印

高知市と長岡郡大津村、介良村の合併協定書の調印が十日午後三時から同市電気ビルで行なわれ、来年一月一日に両村を高知市へ編入することが事実上決まった。今後の手続きとしては、いずれも十日に始まる三市村議会に關係議案をそれぞれ提案、各議会で議決して県知事に廃置分合の申請を行ない、県議会の承認を得たのち知事が自治省に合併を申請、来年二月一日付けの官報告示によつ

て正式合併の運びとなる。(2面に関連記事)
最後の合併協議会は十日午後三時から十八人の委員全員が集まつて高知市の電気ビルで開かれ、ま

都市建設を促進するものと確信する。住民も協議の結果を理解し、合併実現へ民意を結集してほしいとのメッセージを採択した。このあと福島副知事が「十年余の懸案を解決し調印にごまつた関係者の努力に敬意を表す。合併を本当に意義あるものとするため、県も協議会から出された要望の線に沿つて努力する」との祝辞を述べ、大津、介良両村長、高知市長のあいさつがあつて協議会を

終つた。
古田大津村長のあいさつ 三十四年当時から希望していた高知市合併の念願がかなひ、喜びにたえない。大津の生活、経済、社会は高知市と切り離せず、高知市の中で豊かな都市行政の推進を確信しており、念願成就の意義もまたここにあり。
鍋島介良村長のあいさつ 村民の切なる願いであり、喜びと希望を新たにす。すでに高知市への

ツドタウン化しているが、いざ一村となること一抹の寂しさも覚える。調印が済んでも夢のよすがな気持ちで、合併実現の実感かかわらない。
坂本高知市長のあいさつ 深く心に感銘する。十余年の流れの中で成立したことに心からお礼を述べたい。両村の機能をさらに高め、両村の歴史と伝統を踏まえて中核都市として発展させたい。今後とも村の人たちの協力を期待する。県をはじめ関係の方に感謝している。

31日に両村で閉村式

現役場前に記念碑も



大津・介良村

高知市合併まであと二十日に迫った長岡郡大津村と介良村では、いま合併準備の総仕上げに多忙をまわめている。両村ともこのほど合併記念碑の建設など閉村式の日程を決め、着々と準備を進めている。職員らは超勤で残務整理に追われるなか、いよいよラストスタートというところだ。

昨年十二月、合併協定書の調印及び合併議決が行なわれた結果、両村議会はそれぞれ閉村委員会（大津村Ⅰ合併処理委、介良村Ⅱ閉村準備特別委）を発足させた。閉村準備でも一般職員は一月末の出納閉鎖に備え、帳簿や書類の書き換えにギリギリ舞いた。特に税関係などで高知市はコンピュータを採用しているため、両村ともこれまでの書類は一切使えず、電算機用の方式に作り直す必要がある。また、書類や戸籍簿に記載されている『郡』や『村』はすべて『高知市』に改めねばならず、事務は繁忙をまわめている。

昨年末からは大津村六人、介良村五人の臨時職員を採用したが、それでも人手が足らず、このところ連日、職員は残業で整理に当た



机いっぱい帳簿を広げ、整理に追われる介良村役場

っており、中には書類を家に持ち帰って片づけている人もいます。

一方、高知市の各課からは引き継ぎの確認や問い合わせの電話が殺到。『この忙しさにかまけて、肝心の住民サービスがお留守になってはいけない』と注意し合っている。

だが、こうした中にも合併の日を迎える計画は着々と進み、両村相次いで閉村式のスケジュールを決めた。両村とも現在の役場前に記念碑を建設、介良村は三十一日午前九時から、大津村は同日午後一時から、それぞれ除幕式を行なう。

続いて閉村式典に移り、介良村は介良小中講堂（午前十時）、大

津村は大津小中体育館（午後二時）に各方面の来賓を招いて『村』の終わりを告げるとともに、村政功労者の表彰や協力者に感謝状贈呈を行ない、ホタルの光の合唱で『新市』のスタートを迎える段取りだ。

ところで、両村の職員にとつていま関心のマツは合併後のボヌト。どの職場に行くか、閉村準備に追われながら、いろいろと取りざたしている。

昭和47年1月11日

大津、介良 きょうから高知市

高知市は二月一日に長岡郡大津村と介良村を編入合併した。同市にとつては昭和十七年六月一日に香川郡長浜町と千方町を合併して以来の市域拡大で、この合併にも同市の行政面積は十平方キロ(大津四・九四、介良五・〇六)ふえて百四十三・二平方キロとなった。また、人口は八千六百六十七人(大津三千八百五十八人、介良四千三百九十九)ふえて二十万五千六百九十三人

感慨こめ閉村式

ホタルの 光を合唱 記念碑除幕や植樹



④「記念碑はいつまでも」。ここに介良村ありきと感慨の除幕式⑤「新大津地区」の発展を願って記念植樹する役場職員ら(いずれも大津村で)



(いずれも昨年十二月末現在の住民登録人口)となり、県初の「二十五万人都市」が誕生した。両村は高知市への合併に先立って、三十日それぞれ閉村式を行ない、「村最後の一日」を惜しんだ。高知市は二日、両地区に設置する支所の開村式を行ったあと、同日午後合併式を挙げる。

「村の歴史」をしのんだ。閉村式は、ともに同じような規模方式で進行。村民のほか、県や高知市、それに隣接する町村からも関係者が駆けつけた。介良村では林さんら百一人が賞状と記念品を受け、最後は「ホタルの光」の大演奏、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。合併式は、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。

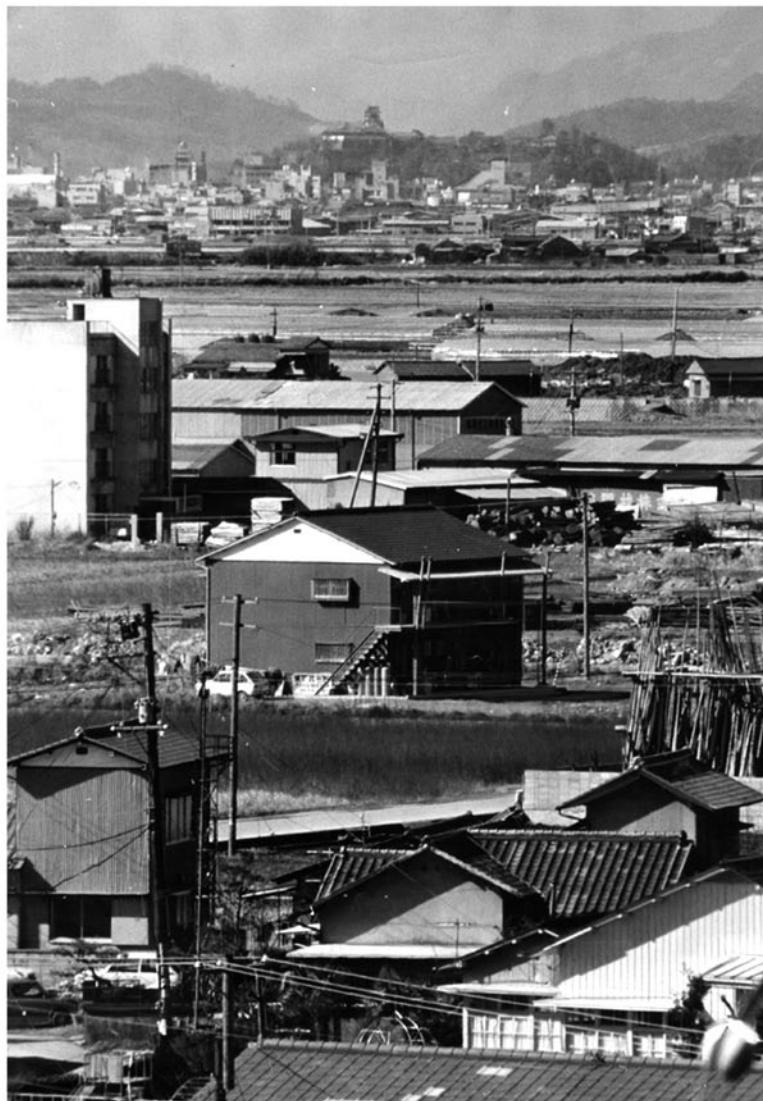
「村の歴史」をしのんだ。閉村式は、ともに同じような規模方式で進行。村民のほか、県や高知市、それに隣接する町村からも関係者が駆けつけた。介良村では林さんら百一人が賞状と記念品を受け、最後は「ホタルの光」の大演奏、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。合併式は、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。



知市の坂本市長は「長い間一言努力でした。歴史と伝統を持つ「村」を財産として守り、手をたずさえてやっていきたいと思います」と両村を歓迎した。

「村」のファイナルを告げる閉村式は、ともに同じような規模方式で進行。村民のほか、県や高知市、それに隣接する町村からも関係者が駆けつけた。介良村では林さんら百一人が賞状と記念品を受け、最後は「ホタルの光」の大演奏、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。合併式は、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。

「村」のファイナルを告げる閉村式は、ともに同じような規模方式で進行。村民のほか、県や高知市、それに隣接する町村からも関係者が駆けつけた。介良村では林さんら百一人が賞状と記念品を受け、最後は「ホタルの光」の大演奏、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。合併式は、大津中一先生がコーラスで式を盛り上げた。村史は閉村式で式典は閉じられた。



— ⑤ —

村がなくなるという状態を表現する場合、「消えゆく村」といえばなんとなくわびしい響きが漂う。が、これを「生まれ変わる村」とでもすればすいぶんニュアンスが違ってくる。そこに新しい地域社会の胎動を感じるからである。

新市街登場

一日、高知市として合併発足はもう村というよりすでに町のした長岡郡大津・介良両村。嘗てながめなのである。々と築いてきた村の歴史にヒリ宅地化、工業化がどんとん進オトを打ったわけだが、どちらみ、高知市からの移住者も「閉村」という暗いイメージもふえる一方だ。「合

合併した大津・介良

「高知市民」になることのために人をみせる人も多いという。いづれにせよ、新しい「城下町」がここに加わったわけだが、こうしたケースはこれから先また出てきそう、姿態が変わり、ない昨今の世情である。

よりも、「ニュータウン誕生」併への案地は十分だったわけ、その意味では、やはりそんなエネルギーを当然の成り行きともいえ内包しているせいであろうか。るが、先祖代々住みついているとにかく同地区の場合、最近住民の中には「便利にはなるの発展ぶりを見ていると、それうが、やっぱり寂しいの」と大津の岩崎山から高知市を望む

昭和47年2月1日

某月

<16

地方政治

期待、寂しさが交錯

なり 以来一〇年を経、昭
和四七年二月一日 高知市に合
る小笠原町、採掘されず本宅に
ついでついでついでと、普通
みかけ石りはすつと増えたと
うのが目撃の文である。

「昭和の歴史は七十三万二
千九百二十四円とついでついで
いまして、話し合ひの総額七十
万円とついでついでと出来まし
除幕式、村議会の川田定一
議長がこう報告した。

『もうこれさえ行けば』
『もうよう書きついで』
通ひ合わせた、のちの村民
も定めて、ひとしきり感心し
た。

歩みだにギンギンと響いて
る古びた村役場とは、およそ対
照的な歴史を記念碑。そこに、高
知市への合併に於ける市民の期待
がこめられているようだった。

「ぼたるの光」に涙
閉村式は午前十時から。会場は
介良、中学校の講堂。講堂とい
つても別荘ではなく、古い木造
校舎の二階の端っこにある。普通
の教室を三つくらい合わせた程度
の広さだ。紙の万国旗が飾られ
下に、参列者はさつと百人。

『介良村は本日をもって、
百二年の長い歴史を閉じること
になりました。村の歴史の概略を申
上げます。約二千年前、
これは土器時代以前のことであり
ますが、高天原で古墳が築かれ
たことに始まり』

大津村の合併記念碑の除幕 雨にぬれてな
かなか幕がはずれなかつた



高知市に合併はしたが

村長。
「二世にわたる村の歴史を閉
じること、人情の常としてち
まづの寂しさを覚えますが、広域
行政は時代の要請であり、村長
としての義務のことにはた
に一語一語力がある。

「あすからはいよいよ高知市
です。みなさん一日も早く高知
市の行政になじり、市の発展、
地域の発展に尽くしてください。
お願いします。」

終わりの方は、まるで手前にか
けて子供を社会に出す時のよ
うな響きがあった。

村政功労者の表彰のあと、福島
副知事、坂本高知市長らの祝辭が
終わると、最後は全員で「ぼたる
の光」。

長い村の歴史に別れを告げる寂
しさが、この時になつてこみ上げ
てきたのだろうか、歌いながら目
頭を押さえる人もチラチラ。期待と
感傷が入り交った、いかにも閉村
式らしい幕切れだった。

最後に大津中校の生徒が歌っ
た「大津村の歌」と「ぼたるの
光」が、その時の音にたちまちか
き消されてしまつた。

へ土佐の大津の
つらゆきまが
忘れ残りの
さたちも さたちも

大津村は雨の中で
午後には舞が移って大津村、介
良村と同じように、村役場前に建
てられた記念碑の除幕が始まった
が、朝からあつてきた天気がさら
に悪くなり、一時どころにはどう
う雨になった。

徳弘副知事、議長が記念碑にか
ぶせた紅白の布のひもを引く張る
が、雨にぬれ右にひたりくつ
ついで、なかなか離れない。

「どうも、村との別れを惜し
むじゅうがじゅうから、こんな元祿
が飛び出して、にぎやかな笑い声

の仕上げ役として大津村最後の村
長に渡された古田さんは、閉村
のことは、どうもさういふ
これに対し、求書として立つた
坂本高知市長は、合併後も大津の
よさを残したいと、受け入れ側の
村長からハートタッチを受け、こ
の文化と美しい自然を大事に守っ
てゆきたい。

雨はかなり強く、会場の屋根に
激しい音をたてていた。

「大津には紀伊の船出で有名
な史跡や遺跡がたくさん残ってい
ます。それに、またまた緑は濃
く、川の水も澄んでいて、古田
村長からハートタッチを受け、こ
の文化と美しい自然を大事に守っ
てゆきたい。」

「やっと同じ戸籍に
こうして、大津村と介良村はそ
れぞれの歴史を閉じて、翌二月一
日から高知市になった。

この合併は、いふぶん古い。三
十二年、新市町村合併促進法に基
づいて興がった計画では、西
村は高知市と合併し、南高知とな
ることになっていた。ところが、
この二つの村だけは南高知には
ならず、高知市への合併を希望し
た。その後、三十二年十月に高知
市が高知市に合併の正式申し入れ

大津 介良 閉村

十年越しの懸案だった高知市と長岡郡大津村・介良村の合併が二月一日に実現した。両村とも、高知市への人口集中のありさまをともに憂へ、都市化の波に流されての合併だった。

広域行政の重要性が高まっている現在、両地域住民の合併にかけられる期待は大きい。その反面で、長い村の歴史を閉じ、懸念はまた別のものがあつたに違いない。合併に立って、両村でそれぞれ行なわれた閉村式では、そうした住民の気持ちや懸念が正確に交錯していた。

某日

5> のある表情

記念碑に託す期待

大津村と介良村が長い村の歴史を閉じた二月三十一日は、暖冬異変の日にあつた。珍しく暖かい日だった。

閉村の行事はまず介良村で始まった。午前九時過ぎ、古ぼけた村役場から職員が十五、六人出てきて、近くの農道そに建たれた合併記念碑の前に集まった。真ん中に、一人だけモノトニックを着込んだ鍋島公村長。

「それでは、たゞいまから記念碑の除幕式を行います。」ふりそで姿の小さな女の字が、役場の文字職員に手伝ってもらって長いひもを引くと、白い布がすりと落ちて大きな記念碑が姿を現わした。

この村は古代気象器の「介良」と呼ばれ、明治四年介良村と



介良村の閉村式、記念品を渡す方も渡される方も緊張気味だ

が超った。

皆さん手ごすらせて姿を見せた記念碑は、高さ約一層三十センチある奈半利川の自然石。

明治二年より八三年間の長岡郡大津村の歴史を閉じ、隣接介良村と共に高知市に合併すると共に村内世帯数九三三戸、人口三八六九人

これも介良村に劣らず立派なものだ。続いて大津小学校と中学校の校庭に、村議会議員と田代権村長ら村役場職員がそれぞれ記念贈り物を、午後二時から、中学校兼用の屋内体育館で閉村式に移った。

四十四年八月に新築されたこの体育館は、合併する高知市内のどの学校と比べても恥ずかしくない近代的な施設。それだけに会場の設備も立派で、参列者も介良村より多いふも多かった。

式次第は介良村と多く同じ。「大津村は古い文化と歴史を持つ村でございますが、最近の社会情勢の変転は目まぐるしく、現在ではすでに高知市と離れて考えることは出来なくなっています。」

昨年八月の選挙で、いわば合併

して話が具体化したか、高知市側の事情もあって一時は立ち消えになっていた。

しかし、最近の都市化現象により、両村とも事実上高知市の一部のちな状態になるに至って話が再燃し、昨年八月には合併協議会が設置され、やっとゴールインしたものである。

つまり、今度の合併は戦後の一時期のように、三十万人都市とか、五十万人都市とかいうような特定の行政目標を掲げて進められた合併とは違う。実際にはごく同じ環境の下で生活している夫婦が、正式に同じ戸籍になつたよなもの、ごく自然発生的な合併なのである。

五カ年計画を巨く

それはいつでも、長い間の懸念だっただけに、両地域の今後にかけられる期待は大きい。

合併協議会をつくらせた建設計画によると、四十七年度から五年間に三億七千万円（大津七億一千八百万円、介良五億八千九百万円）を投じて、①都市基盤の整備②地場産業の振興③生活環境の整備④住民の安全確保⑤社会福祉の増進⑥教育文化の向上の両行政の各面で具体的な事業が進められることになっている。

この計画は、あくまで合併時点での両村の財政能力をもとにたて



大津文化祭の会場と女性パワールのひとり、福富宣子さん

地域文化を守れ

高知市大津地区の奮闘

> 2 <

高知市に吸収合併されて十

八年。三十一万大都市の中

で、大津の個性がじわじわと

薄れていった。自分の判断で

行動できる自治体(大津村)から、本庁へすべてお伺いし

なければならぬ地区への

「格下げ」— そのような一

面は確かに表面化してきた。

だが、そんな状況の中で女

性パワーが文化祭に向かって

燃え上がった。

賛同者は次々と増え、出展を

約束した住民は小学生からお

年寄りまで千人に達した。大

津の九人に一人が文化事業の

18年ぶりの文化祭

た坂本睦男さん(八二)。昭和四十六年、最後の「大津村展」を催した。それだ

「格下げ」— そのような一

面は確かに表面化してきた。

だが、そんな状況の中で女

性パワーが文化祭に向かって

燃え上がった。

賛同者は次々と増え、出展を

約束した住民は小学生からお

年寄りまで千人に達した。大

津の九人に一人が文化事業の

見せたい。そのような環境を

盛り上がり

「蛍が飛び、ドショウが泳

いだ大津の自然を子供たちに

見せたい。そのような環境を

喫茶コーナーの応援をする

開幕した。あの「大津村文化

「蛍が飛び、ドショウが泳

いだ大津の自然を子供たちに

見せたい。そのような環境を

喫茶コーナーの応援をする

開幕した。あの「大津村文化

高知市大津に開通した都市計画道路の舟出橋。北詰めに毛糸で編んだケープと帽子を着たお地蔵さんがいる。そと二児を抱き寄せる慈母像で、その視線は、橋を渡る子供たちを見守るかのようである。

古い舟出橋の南詰めは電車通りと交差し交通事故が多かった。そのため昭和四十四年、地蔵は近くの大津小学校の児童の交通安全を願って建てられた。「あれ

から事故は少なくなつた」と近所の人は言う。

以来、四半世紀。地蔵はいつもケープと帽子を着ている。聞けば、どこかのおばあちゃんが年一回ほど、着せ替えていたらしい。一昨年夏、地蔵は橋の架け替え工事で橋北詰めに移された。その時はおばあ



ケープを着た地蔵



住民の手でいつもきれいなケープを着ている交通安全地蔵（高知市大津乙）

さんが編んだケープを着ていたが、風雨で色あせ、ほつれが目立っていた。

「あのおばあちゃんがずっと世話をしていたので、自分が着せ替えていいか迷いました」と話すのは近くに住む松岡智子さん(五七)。

松岡さんは橋北詰めにある市役所の支所で週一回、編み物を教えている。地蔵の前を通る度にケープが気になった。その年の秋、

「やられんろうか」と思いながらも毛糸でケープと帽子を編んで着せ替えた。

それから一年半。橋は完成し、いよいよ開通式が行われることになった。松岡さんの編んだケープはもう古くなっていた。

「大勢の人が集まるのに古いままでしかわいそう」ときりぎりまで迷ったが、開通式の前日になってケープは古いまま。とうとう

松岡さんは式の前夜に帽子、その日朝にケープを急いで編んだ。

こうして地蔵は真新しい衣装で式に臨んだ。実はそのおばあちゃん、

昨年秋、八十五歳で亡くなったそう。しかし、松岡さんのような心優しい人がいる限り、これからも地蔵はきれいなケープを着ていることだろう。

(社会部・浜田成和)

大津の昔の暮らし後世に

南国市 歴史民俗資料館 民具館の収蔵品展示



大津小の児童がつくった舟戸、北浦付近の模型を見つめる子供たち

南国市岡豊町八幡の県立歴史民俗資料館で三十日、秋の企画展「昔のくらしと道具」大津民具館の資料からが始まった。高知市大津が長岡郡大津村だった昭和四十年代前半に、主に集められた民具が展示されている。来年一月十七日まで。

豪雨災害逃れた大津小 児童作製の地域模型も

大津民具館は、高知市と合併する前の昭和四十一年、当時の故・徳弘村長らが民具を残そうと岩崎山に建設。多くの村民が民具を提供した。
しかし、年代が進むにつれ、使用法や名称が分からない民具が増加。貴重な民具を大津での名称とともに後世に残そうと、地元の人たちでつくる「大津民具保存会」（西原英雄会長）を

中心に、高知市教委、歴史館が六、七年かけて資料の整理に取り組んだ。
大津地区は先の98高知豪雨で大きな被害を受けたが、同民具館は山の上であり無事。また、この八月から九月にかけて大津小の児童と父母が作製した昭和十一年前後の舟戸、北浦付近の

模型は、大津支所二階に保管してあったため難を逃れ、展示された。

会場は火の昔「飯と酒」「紅と紺」のテーマごとに展示。真っ赤な手押しポンプ、炭を入れて使ったアイロン、稲作の時に使う草取り機など約二百点が並ぶ。舟入川は水上交通の大動脈だっただけに、ウズギばさみや腰みのなど漁の道具も展示され、水が身近だった大津村の生活がつかえる。
香美郡赤岡町から訪れた北川作太郎さん（60）、今子さん（62）夫婦は「懐かしいものがたくさんある。よく保存していますね」と感心していた。

昨年9月の'98高知豪雨で大きな被害を受けた高知市大津乙の大津中学校(三谷昭雄校長、288人)に「水書を忘れない」の思いを込めた記念塔が完成し12日、生徒、PTA、教員約100人が除幕した。



大津中に記念塔



大津中グラウンドに完成した豪雨の記念塔を見る生徒たち。「水書を忘れない」という気持ちを新たにした

大津中学校は昨年九月二十四日の集中豪雨で、教室や体育館などの施設が一ぱ

以上浸水。八日間の休校を余儀なくされ、その後も学校行事を縮小するなど影響が残った。

記念塔の建立は一地域が助け合う大切さを学んだことなど水書をうろく思考でとらえていこうと考えたPTAが計画した。

正門おきの校庭に建てられた塔はステンレス製で

円すい形と円盤三つを組み合わせたデザイン。高さはグラウンドから二・三メートル。大津地区で特に被害がひどかった地域にきた水の高さ

を示しているという。経費は十六万円でPTA会費の中からねん出た。

除幕式では、PTAを代表して安松義昭会長が「忘

れなくとも忘れられない大

雨を記憶にとどめておこうとあいさつ。生徒会を代表して二年生の高橋弘幸

君と天川内康晴君が除幕した。

参加者は塔を見つめ水書の苦しさを思い、生徒会最

の三年生、小松未来さんは「一番印象に残っているのは近所で助け合ったこと。水書で地域のきずなが深まったと思う。水書があったことを、みんなに覚えておいてほしい」と話していた。

「一番印象に残っているのは近所で助け合ったこと。水書で地域のきずなが深まったと思う。水書があったことを、みんなに覚えておいてほしい」と話していた。

助け合う大切さ学んだことも

1999年(平成11年)9月13日

津波メカニズムやグッズ紹介

大津小が防災パンフ

高知市

災害に強い街づくりを目指し、防災学習に取り組んできた高知市大津この大津小学校の六年生百十五人が防災啓発パンフレットをこのほど作製。「いざという時」のために役立ててもらおうと、地域住民らに配布している。

同小は'98高知豪雨で甚大な被害を受け、現在も体育館の壁などに水没時の跡が残っている。

六年生は災害の恐怖を乗り越え、「大津を災害に強いまちにしたい」を合言葉に昨年の二学期に十六のプロジェクトチームを結成。高知大学理学部の岡村真教授、日本赤十字社県支部、同市防災

'98豪雨を体験 6年生が作製

対策室などの協力を得て学習を進めてきた。学習成果の結晶であるパンフレットは、B4判で十三頁。児童の考えた「南海トラフ博士」「ポウくん」「サイちゃん」などのキャラクターが津波の発生メカニズムや防災グッズなどをカラーの図入りで紹介。「ふだんから一人ひとりが防災意

識をもとに」「地いきで災害弱者を守るためのシステムをつくってほしいです」などといった提言も掲載している。パンフレットは千部作製。既に託老所利用者ら地域住民のほか、'01高知西南豪雨の資料を送ってもらった土佐清水市の下川口小などに配布した。希望者には一部五百



地域住民らに配布

カラーのイラストや提言などを盛り込んだ大津小の防災パンフレット
 岡村教授は「災害から身を守ってほしいというのが子どもたちの願い。南海地震もいつ来るかわからない。パンフレットが防災を意識するきっかけになれば」と話している。問い合わせは同小（088・8666・2124）まで。

2002年(平成14年)3月17日

東北被災地忘れない

高知から東日本大震災の被災地へピアノを贈る運動に高知市の大津小学校児童がつくる「クルック・ソングメイツ」が参加し、歌やダンスで県民にPRを続けている。発足から約1年半の間に30回以上も舞台上立ち、福島県の被災者

高知市大津小 児童グループピアノ贈る運動PR

クルックは、県民有志「一滴の会」が進める募金運動のPR隊。高知市のシンガー・ソングライター、しまむらかずおさんを先生役に、大津小学校からメンバーを募って2011年6月に発足した。募金の報告集会やイベントなどで歌やダンスを披露してきた。メンバーは半年ごとに公募し、現在は2、6年生の11人が4期生として活動。塾や習い事でやめるを得ない児童がいる中、水野さんはただ一人、1期から活動を続け

ている。「最初は無料で歌やダンスを習えるから参加しただけ、被災地のことを知って気持ちが変わった。自分だけの活動じゃなくなった」クルックは昨年8月に福島県を訪問した。福島第1原発が立地する古里から約100キロ離れた陸校舎に間借りする小学校、約500世帯が身を寄せる仮設住宅……。水野さんもそこへ足を運び、メンバーと一緒に歌やダンスを贈った。「(被災者は)みんな

も励ました。リーダー役の水野集偉(つとい)さん(12)「同小6年」は「被災地を忘れたくない。子どもでも、わたしにも、できることはいっぱいある」と取り組んでいる。(芝野祐輔)

心に傷があるはず。どんな顔をしちゅうがやるされた時間はわずか。福島県の児童らが作詞した「学舎(まなびや)」のほか、オリジナル曲をメンバーと一緒に練習しながら、「出演するのはクルックやけど、コンサートは被災地の人も含めたみんなのもの。(中学生になっても)スタッフとして活動を支えよう」と考えている。

その後、被災者から自宅に届いたお礼のはがきには「ピアノの音色、音楽の方のおかげで、昨年よりもみんな元気いっぱい。つといちゃんたちのコンサートをなつかしく思い出しています」と書かれていた。

この春中学生になった水野さんは間もなく「被災地へピアノを贈ろうと歌って踊る水野集偉さん」手前「クルック・ソングメイツ」(高知市の大津ふれあいセンター)加治屋隆文撮影)



ちいきのおと

36

地域の音



おおつおつ
大津乙

高知市



揚げたて長たぐきん

カシワ

中央の横断線をまたぐ橋の架かる「小倉川」が流れる「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。



ふるりの時 (1972年)

高知市と合併 閉村式

高知市大津地区は1972(昭和47)年まで、長岡郡大津村だった。写真は同年1月31日、村民会議員らが閉村式の合併記念碑を除幕する様子。この後、閉村式も行われたと翌日の本紙が報じている。大津村史によると、村は1954年から閉村式準備。財政は比較的潤っていたという。村は閉村式の合併記念碑を建て、70年に合併された。村の合併記念碑は、閉村式記念碑として建てられた。閉村式記念碑は、閉村式記念碑として建てられた。閉村式記念碑は、閉村式記念碑として建てられた。

伝統紡ぐ2軒の紺屋

福永染工場と田鍋染工



福永染工場の紺屋(左)と田鍋染工場の紺屋(右)



田鍋染工場の紺屋(左)と福永染工場の紺屋(右)

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。



田鍋染工場の紺屋(左)と福永染工場の紺屋(右)

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。



ちよこ

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

田鍋染工場の紺屋(左)と福永染工場の紺屋(右)

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。

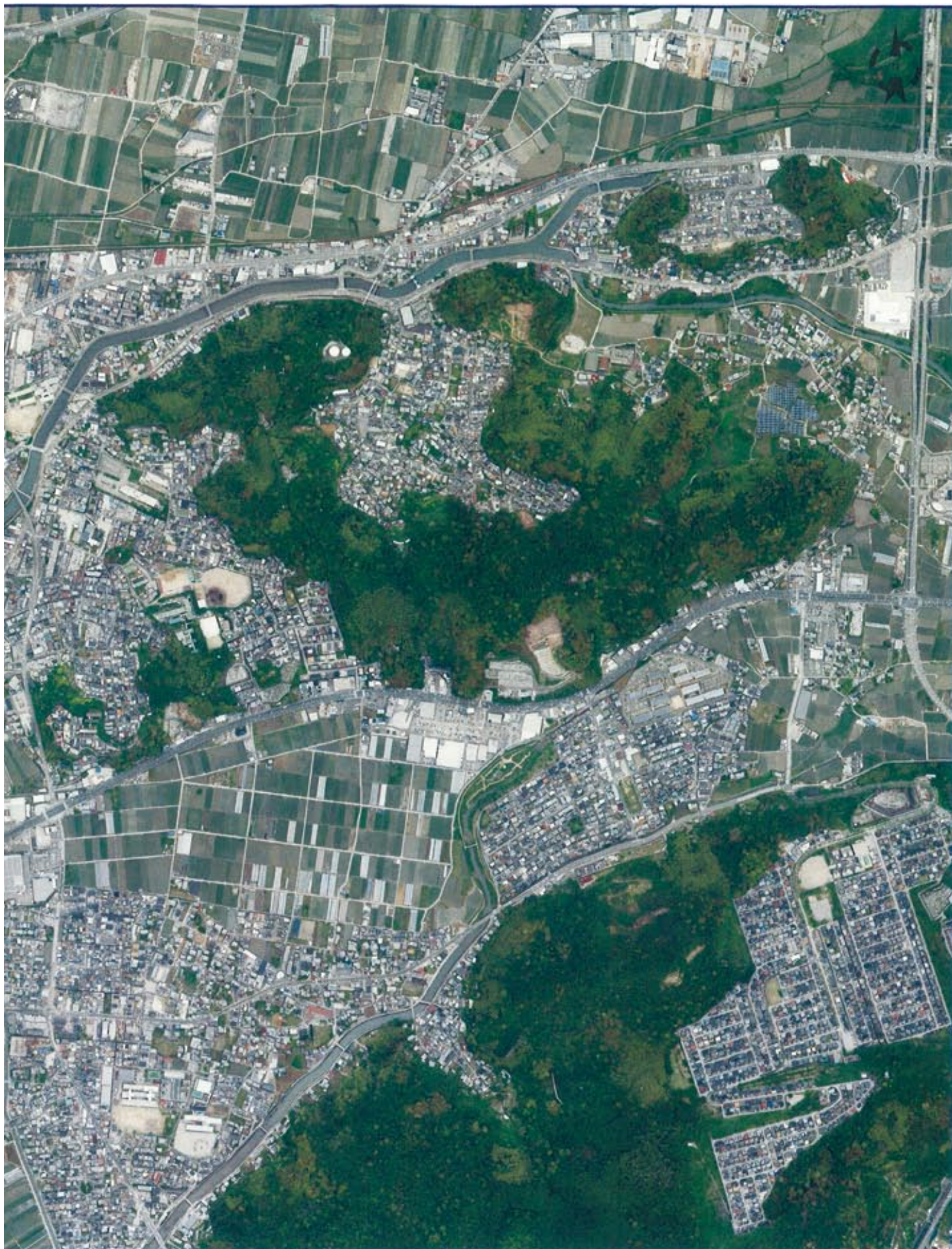
「おおつおつ」の町は、昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。昔ながらの賑わいがある。





昭和49(1974)年3月・撮影





令和4(2022)年3月・撮影

大津の世帯数・人口の推移

昭和47(1972)年 12月末日・住民実態調査
昭和52(1977)年以後 10月1日・住民基本台帳

	世帯数		人口	
	高知市	大津	高知市	大津
昭和47(1972)年	97,124	1,356	265,043	4,245
昭和52(1977)年	108,719	1,977	288,997	6,045
昭和57(1982)年	115,466	2,581	304,506	7,715
昭和62(1987)年	121,715	3,040	312,201	8,745
平成4(1992)年	128,468	3,372	316,591	9,263
平成9(1997)年	137,114	4,134	323,439	10,716
平成14(2002)年	144,985	4,408	327,846	10,915
平成19(2007)年	150,407	4,564	326,760	10,673
平成24(2012)年	161,516	4,753	340,228	10,714
平成29(2017)年	163,168	4,865	332,387	10,496
令和4(2022)年	164,618	5,028	320,334	10,297

大津/高知市合併50周年記念誌編集委員会委員名簿

大崎 昭雄 岡林 敏行 岡村 隆夫
 刈谷 好孝 澤田 昭子 高村 禎二
 高村 宏 竹林 伸夫 寺内 璋仁
 田所 稔 田所 玲子 西川 淳一
 濱田 敏裕 藤岡 省次 藤山 英一郎
 山添 真次郎

はばたけ大津 3

～ 合併から50年、そして未来へ～

発行日 令和5年2月1日
発行者 大津/高知市合併50周年記念誌編集委員会
住 所 高知市大津930番地5
高知市大津ふれあいセンター内
印刷所 高知市永国寺町4-18
池田印刷株式会社
一般財団法人 大津教育振興会助成事業